笛吹市文化財調査報告書　第６集

山梨県笛吹市

五里原遺跡

主要地方道甲府笛吹線建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

山梨県峡東建設事務所

笛吹市教育委員会

序

五里原遺跡の発掘調査は、平成16年10月の六町村合併以前の7月7日に八代町教育委員会によって始められ、合併後は笛吹市教育委員会が調査を引き継ぎ行って、平成16年11月26日に終了した。そして、引き続き室内整理作業に入り、調査の関係者・関係機関の努力と協力によって、今回調査報告書が刊行できることは喜ばしいかぎりである。

さて本遺跡は、第Ⅱ章でも述べられているとおり、浅川扇状地の上に営まれた古墳時代と平安時代を主体とする集落址である。笛吹市には度重なる洪水によって押し出された砂礫で形成された御坂山地北西部に広がる幾多の扇状地があり、この扇状地上に集落遺跡や墳墓などが多数所在していることから、扇状地が提供する耕地とその背後の山林、豊富な湧水が私たちの先祖の暮らしを支えてきたといえる。山岳部や河川沖積地の果たした役割も決して小さくはないが、やはり人々の生業の基盤となったのは浅川扇状地をはじめとする扇状地群であったことは否定できない。

周知のとおり、笛吹市は遺跡の宝庫と言ってもよく、特に古代の政庁や寺院が置かれるなど、山梨県の古代史を考える上で非常に重要な地域である。当然ながらこの時期の集落遺跡や墳墓などが豊富に埋もれており、将来、官衙跡、寺院址などがいっそう明らかになるにつれ、甲斐の古代の有様がはっきり描ける日もそう遠くないのではないかと期待も膨らむ。そしてこれらの遺跡の多くが扇状地の上に営まれてきたことに思いをいたす時、現代に生きる私たちも力を尽くして、この貴重な景観を保全していきたいと願うのである。

最後に現地調査および報告書発行に尽力された方々はもちろん、期日調整など様々な助力を頂いた山梨県峡東建設事務所、市土木部その他関係各位に深く感謝申し上げたい。

平成19年3月30日

笛吹市教育委員会

教育長　　芦　原　正　純

例　　言

1．　本書は平成 16 年度に行った山梨県笛吹市八代町南地内に所在する五里原遺跡の発掘調査報告書である。

2．　発掘調査は主要地方道甲府笛吹線の道路拡幅と歩道設置工事に先立つもので、平成 16 年 10 月 12 日の町村合併までは八代町教育委員会が、町村合併後は笛吹市教育委員会が山梨県から委託されて実施した。

3．　発掘調査は平成 16 年 7 月 7 日から平成 16 年 11 月 26 日にかけて行った。

4．　室内整理・報告書作成作業は平成 17 年 2 月 1 日より平成 19 年 3 月 30 日まで、途中、さまざまな要因による中断はあったが笛吹市教育委員会が実施した。

5．　本報告書の執筆・編集・写真撮影は伊藤修二が行ったが、第Ⅴ章の「子持勾玉について」は望月秀和が執筆した。

6．　発掘調査から報告書作成に至るまで、次の諸氏・機関からご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

大嶌正之　岡野秀典　河西　学　櫛原功一　坂本美夫　杉本悠樹　小林広和
小林孝子　林部　光　三沢達也　村石真澄
山梨県教育委員会学術文化財課　山梨県立考古博物館　山梨県埋蔵文化財センター
帝京大学山梨文化財研究所

（順不同・敬称略）

7．　本書における出土品および記録図面・写真等は笛吹市教育委員会が保管している。

調　査　組　織

調査事務局　平成 16 年 7 月 7 日～平成 16 年 10 月 11 日
　　霜村純志（八代町教育委員会教育長）
　　河野　修（八代町教育委員会社会教育課課長）
　調査担当者　伊藤修二（八代町教育委員会社会教育課文化財係係長）
　主任調査員　小坂規恵（八代町教育委員会社会教育課）

調査事務局　平成 16 年 10 月 12 日～平成 19 年 3 月 30 日
　　芦原正純（笛吹市教育委員会教育長）
　　高野あけみ（笛吹市教育委員会教育次長）
　　田中勤一（笛吹市教育委員会社会教育課課長）
　　平成 16 年 10 月 12 日～平成 17 年 3 月 31 日
　　風間喜久雄（笛吹市教育委員会社会教育課課長）
　　平成 17 年 4 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日
　　小川勝明（笛吹市教育委員会文化財課課長）
　　平成 18 年 4 月 1 日～平成 19 年 3 月 31 日

調査担当者　伊藤修二（笛吹市教育委員会文化財課文化財担当）
望月秀和（笛吹市教育委員会文化財課）

発掘調査作業員　雨宮ゆり　飯高　洋　河西久美子　小林正和　高野眞寿美
中込　榊　藤原さつき　宮川菊江　村松久美子　渡辺明美
室内整理作業員　荒川奈津江　河西久美子　斉木愛子　高野眞寿美　西山和子
藤原さつき　若尾洋子　渡辺明美

凡　　例

1．　掲載した遺構図面の縮尺は下記の通りである。
　　竪穴住居跡および竪穴状遺構　・・・　1/60　　カマド　・・・　1/30
2．　遺物実測図の縮尺は下記の通りである。
　　土器　・・・　1/3　　土製品および石製品　・・・　1/3
3．　遺構の挿図中の ▒ は焼土跡を、カマド微細図中の ▒ は粘土あらわす。
4．　遺物の挿図中の土器断面が ■ は須恵器、▒ は灰釉陶器である。また、土師器器面の ▒ は黒色処理をあらわす。
5．　表の大きさの（　）は推定値をあらわす。
6．　住居跡の遺構番号は、調査順序により順次付したものである。そのため、調査の進展に伴い遺構と判断しかねるもの、他の遺構と同一になると判断された遺構番号（9 号住居跡・14 号住居跡）は、混乱を避けるために欠番としている。

目　　次

序　　文
例　　言
凡　　例
目　　次
挿図目次
図版目次
表 目 次

第Ⅰ章　　調査に至る経緯と概要 …………………………… 1
第Ⅱ章　　遺跡の位置と環境
　第１節　位置と地理的環境 ……………………………… 1
　第２節　歴史的環境 ……………………………………… 2
第Ⅲ章　　調査の方法と層序 ………………………………… 7
第Ⅳ章　　遺構と遺物
　第１節　古墳時代の遺構と遺物
　　１　竪穴住居跡 ………………………………………… 9
　　２　竪穴状遺構 ………………………………………… 21
　　３　遺構外出土遺物 …………………………………… 22
　第２節　奈良時代の遺構と遺物
　　１　竪穴住居跡 ………………………………………… 25
　第３節　平安時代の遺構と遺物
　　１　竪穴住居跡 ………………………………………… 27
　　２　遺構外出土遺物 …………………………………… 34
　第４節　時期不明の遺構
　　１　竪穴住居跡 ………………………………………… 35
第Ⅴ章　　まとめ ……………………………………………… 36

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・2
第 2 図　周辺遺跡分布図 ・・・・・・・・・・3
第 3 図　調査範囲図 ・・・・・・・・・・・・・・6
第 4 図　グリッド設定図・・・・・・・・・・・・・7
第 5 図　遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・・8
第 6 図　2号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・・・9
第 7 図　2号住居跡出土遺物 ・・・・・・・9
第 8 図　4号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・・10
第 9 図　4号住居跡出土遺物 ・・・・・・11
第 10 図　6号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・12
第 11 図　6号住居跡出土遺物 ・・・・・12
第 12 図　8号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・・13
第１３図　8号住居跡出土遺物 ・・・・・14
第 14 図　11号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・14
第 15 図　11号住居跡出土遺物 ・・・・・15
第 16 図　12号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・16
第 17 図　12号住居跡出土遺物 ・・・・・16
第 18 図　15号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・17
第 19 図　15号住居跡出土遺物 ・・・・・18
第 20 図　17号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・20
第 21 図　17号住居跡出土遺物 ・・・・・20
第 22 図　1号竪穴状遺構 ・・・・・・・・・・21
第 23 図　1号竪穴状遺構出土遺物 ・・22
第 24 図　遺構外出土遺物
（古墳時代1）・・・・・22
第 25 図　遺構外出土遺物
（古墳時代2）・・・・・23
第 26 図　10号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・25
第 27 図　10号住居跡出土遺物 ・・・・・26
第 28 図　1号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・27
第 29 図　1号住居跡出土遺物 ・・・・・・28
第 30 図　3号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・29
第 31 図　5号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・29
第 32 図　3号住居跡出土遺物 ・・・・・・30
第 33 図　5号住居跡出土遺物 ・・・・・・31
第 34 図　7号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・32
第 35 図　7号住居跡出土遺物 ・・・・・・32
第 36 図　13号住居跡 ・・・・・・・・・・・・33
第 37 図　13号住居跡出土遺物 ・・・・・33
第 38 図　遺構外出土遺物
（平安時代）・・・・・・34
第 39 図　16号住居跡 ・・・・・・・・・・・・35
第 40 図　子持勾玉型式分類模式図・・38

図版目次

図 版 1　調査前風景
遺構検出状況
（B-19・B-20グリッド付近）
遺構検出状況
（B-38・B-39グリッド付近）
1号住居跡
1号住居跡カマド
2号住居跡
3号住居跡
3号住居跡遺物出土状況
図 版 2　4号住居跡
5号住居跡
7号住居跡
10号住居跡
10号住居跡カマド
12号住居跡
12号住居跡遺物出土状況
図 版 3　15号住居跡
15号住居跡カマド
15号住居跡遺物出土状況
17号住居跡
17号住居跡遺物出土状況（1）
17号住居跡遺物出土状況（2）
1号竪穴状遺構
子持勾玉出土状況
図 版 4　1号住居跡出土遺物
3号住居跡出土遺物
5号住居跡出土遺物
6号住居跡出土遺物
2号住居跡出土遺物
10号住居跡出土遺物
12号住居跡出土遺物
11号住居跡出土遺物
図 版 5　15号住居跡出土遺物
17号住居跡出土遺物
遺構外出土遺物（古墳時代）
遺構外出土遺物（平安時代）
子持勾玉

表目次

第 1 表　2号住居跡遺物観察表・・・・10
第 2 表　4号住居跡遺物観察表・・・・11
第 3 表　6号住居跡遺物観察表・・・・13
第 4 表　8号住居跡遺物観察表・・・・14
第 5 表　11号住居跡遺物観察表・・・・15
第 6 表　12号住居跡遺物観察表・・・・17
第 7 表　15号住居跡遺物観察表・・・・19
第 8 表　17号住居跡遺物観察表(1)・20
第 9 表　17号住居跡遺物観察表(2)・21
第 10 表　1号竪穴状遺構遺物観察表・22
第 11 表　遺構外出土遺物観察表
（古墳時代）・・・・・24
第 12 表　10号住居跡遺物観察表(1)・26
第 13 表　10号住居跡遺物観察表(2)・27
第 14 表　1号住居跡遺物観察表 ・・・・28
第 15 表　3号住居跡遺物観察表 ・・・・31
第 16 表　5号住居跡遺物観察表 ・・・・31
第 17 表　7号住居跡遺物観察表 ・・・・32
第 18 表　13号住居跡遺物観察表(1)・33
第 19 表　13号住居跡遺物観察表(2)・34
第 20 表　遺構外出土遺物観察表
（平安時代）・・・・・35

第Ⅰ章　調査に至る経緯と概要

今回報告する五里原遺跡の発掘調査は、山梨県峡東地域振興局石和建設部（現在の山梨県峡東建設事務所）によって行われた主要地方道甲府笛吹線の道路拡幅と歩道設置工事に先立ち実施されたものである。この工事は合併して笛吹市となる前の東八代郡八代町の時に、歩行者の安全確保を主な目的として計画されたもので、平成13年度に長さ約80mを対象として発掘調査と工事が行われている。今回はそこからさらに西側へ約210mの区間で工事が行われることとなり、山梨県峡東地域振興局石和建設部から事業用地内の埋蔵文化財の所在について、八代町教育委員会に照会が行われた。そこで、町教育委員会では遺跡地図との照合を行い、事業用地が周知の埋蔵文化財包蔵地である五里原遺跡内に所在していることを確認、さらに、平成13年度の工事施工区間で行った発掘調査の状況から判断して、今回の事業用地内にも埋蔵文化財が所在している可能性が高いことから、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県峡東地域振興局石和建設部、八代町建設整備課と協議を行い、試掘調査を実施して埋蔵文化財が所在している範囲とその状況を事前に調査し、その結果を基に再度協議を行うこととした。

試掘調査は文化庁および山梨県から補助金を受け、平成16年4月13日から平成16年4月22日にかけて行った。その結果、古墳時代から平安時代にかけての土器が出土し、竪穴住居跡と考えられる落ち込みやカマドが確認され、工事予定地の東端から西側へ向かって、概ね105mの範囲で埋蔵文化財が所在していることが明らかとなった。そこで、山梨県峡東地域振興局石和建設部、八代町建設整備課、町教育委員会はその範囲に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、工事日程も差し迫っていることから記録保存を目的とした発掘調査を早急に行うこととなった。調査は6月議会における補正予算成立後の平成16年7月7日に着手し、平成16年10月12日の町村合併後は笛吹市教育委員会が引き続き調査を行い、平成16年11月26日に終了した。その後、他の遺跡の発掘調査や室内整理作業、調査報告書の作成等を行いながら断続的に出土遺物等の整理作業を行い、平成19年3月に調査報告書を刊行するに至った。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第1節　位置と地理的環境

山梨県笛吹市は甲府盆地の中央部やや東寄りに位置しており、東側は甲州市および大月市と、西側は甲府市、南側は南都留郡富士河口湖町、北側は山梨市とそれぞれ境を接している。市の総面積は201.92k㎡で、地形的にみると市の名称の元になった奥秩父山系の一つである標高2,475mの甲武信ヶ岳に源流を発して、南巨摩郡鰍沢町で釜無川と合流して富士川となる笛吹川を挟んで、南東側には御坂山塊とその北斜面の山地や丘陵、笛吹川の支流である狐川、浅川、金川、日川等、また、日川に流入する大石川、京戸川等の河川がそれぞれ形成した扇状地が広がっており、北西側には大蔵経寺山や兜山、棚山をはじめとする秩父山地の前衛の山々、周囲の山塊から運ばれてきた土砂が笛吹川や平等川により横に拡散されたことによって形成された沖積地が広がっている。

五里原遺跡は浅川によって形成された浅川扇状地の扇央部にあるが、その中でも扇端部に近いところに立地している。この扇状地は甲府盆地の南東縁に発達した扇状地群の中で西端部に位置しており、異なる時代に形成された二段の扇状地である。八代町竹居区の門林付近を扇頂として北西方向に甲府盆地にむかって約70度に開く扇型をしており、面積は約8k㎡、その扇端は八代町の北、南、永井、米倉という地区の北西寄りにみられる小さな急斜面あたりまでで、笛吹川の沖積地、かつての氾濫原と境を接している。今回調査を行った地点は標高約282mを測り、南東から北西に向かって徐々に標高を減じていくような緩やかな傾斜地となっている。

第２節　歴史的環境

笛吹市は平成 16 年 10 月 12 日に東八代郡下の石和町、御坂町、一宮町、八代町、境川村、東山梨郡下の春日居町が合併して誕生し、その後、平成 18 年 8 月 1 日に東八代郡芦川村を編入して現在に至っている。これらの町村は、県内でも屈指の遺跡集中地帯を構成しており、合併前にはさまざまな開発工事に伴う遺跡の発掘調査が盛んに行われていた。遺跡を時期的にみると、縄文時代から近世にわたる各期を通して存在しており、その分布も粗密がみられるものの市内のほぼ全域に広がっていて、古来より人々の足跡が多く刻み込まれてきたことが窺える。

五里原遺跡は昭和 39（1964）年に刊行された『山梨県遺跡地名表』には掲載されていなかったが、昭和 50（1975）年に刊行された『八代町誌』には、具体的な遺跡名は示されていないものの縄文時代中期後葉から後期初頭の土器や古墳時代前期の土師器をはじめとする遺物の散布がみられると紹介されており、その存在が広く知られるようになった遺跡である。その後、昭和 53（1978）年に刊行された笛吹川沿岸土地改良事業地域内の『埋蔵文化財分布調査報告書』や昭和 54（1979）年に刊行された『山梨県遺跡地名表』では、八代町の南区のほぼ全域と北区の一部を大きく括った南北遺跡の中に含められており、昭和 58（1983）年に八代町教育委員会が今回の調査地点から約 80m南側を調査した際には五里原遺跡という遺跡名を付けるなどして、遺跡名に統一性がみられなかった。このため、平成元年度に八代町教育委員会が行った遺跡の詳細分布調査では、昭和 58 年度に調査した地点を含めた東西約 500m、南北約 250mの範囲を五里原遺跡としている。

第１図　遺跡位置図（S=1:50,000）

1. 五里原	2. 長崎	3. 根岸	4. 弁戈天	5. 扇田	6. 真道澤	7. 侭ノ下
8. 神田	9. 堀ノ内	10. 下新兵衛屋敷跡	11. 原	12. 二子塚	13. 向原	14. 下原
15. 天神原	16. 今宮	17. 町屋	18. 長慶寺	19. 宮之後	20. 豊気	21. 下長崎
22. 横田	23. 長沢	24. 馬見塚	25. 柳田	26. 芦川田	27. 渋田	28. 身洗沢
29. 三原沢	30. 大庭	31. 武田信成館跡	32. 奴白	33. 能成寺跡	34. 竹之内	35. 飯田氏屋敷跡
36. 奴白屋敷跡	37. 上小下	38. 久保A	39. 金地蔵	40. 伊勢之宮	41. 八王子	42. 下神之木
43. 浪人屋敷跡	44. 森の上北	45. 森の上南	46. 馬見塚古墳	47. 山神塚古墳	48. 地蔵塚古墳	49. 双子塚古墳
50. 無名古墳	51. 伊勢塚古墳	52. 真根子塚古墳	53. 団栗塚古墳	54. 無名古墳	55. 信守塚古墳	56. 能成寺塚古墳
57. 狐塚古墳	58. 弁財天塚古墳	59. 鎧塚古墳	60. 無名古墳	61. 樹塚(荘塚)古墳	62. 物見塚古墳	63. 古柳塚古墳

第２図　周辺遺跡分布図 (S=1:10, 000)

本遺跡はこれまでに3回の発掘調査が行われている。いずれも八代町教育委員会によって行われたものであるが、古墳時代前期の住居跡、同中期の住居跡、同後期の住居跡、土坑、カマド跡、配石址、溝状遺構、平安時代の住居跡をはじめ、時期不明の竪穴状遺構、土坑、焼土跡が確認されている。また、遺物も縄文時代中期前葉および中期後半から後期初頭の土器や石器、古墳時代および平安時代の土師器、須恵器、鉄製品等が多数出土していることから、本遺跡は縄文時代中期前葉および中期後半から後期初頭や古墳時代、平安時代の遺跡で、中でも古墳時代と平安時代を中心とする遺跡であることが明らかとなっていた。

本遺跡が所在する浅川扇状地上には、先に行われた分布調査によって縄文時代から近世に至る多くの遺跡が存在していることが確認されている。これらの遺跡の中で発掘調査が行われているものはまだ限られており、その様相が明らかとなっている遺跡は決して多いと言えるような状況ではないが、近年になって発掘調査事例が徐々に増加してきており、その様相が明らかとなりつつある。

本扇状地内に所在している縄文時代の遺跡は、花鳥山遺跡、銚子原遺跡、上の平A遺跡等といった扇状地の南東側に広がる丘陵上に所在する遺跡ほど濃密ではないが、前期末および中期中葉から後期前葉にかけての遺跡が、扇状地の扇頂部と扇央部に点在している。これらの中で最も注目される遺跡が三光遺跡である。この遺跡は扇頂部に立地しており、中期後葉から後期前葉にかけての土坑、竪穴状遺構、集石跡、配石遺構、焼土跡等が確認され、祭祀的な要素を持った遺構が多数確認されている。この三光遺跡と同様に祭祀的な要素を持つ遺跡に梨木遺跡がある。この遺跡は扇央部といっても扇頂部近くに立地しており、縄文時代前期末の集石土坑や配石土坑、集石跡、土坑等が確認されている。この他、扇央部に立地している堀ノ内遺跡（9）、金地蔵遺跡（39）、下長崎遺跡（21）、南居遺跡、夜長遺跡、東小山B遺跡で縄文時代の遺構が確認されているが、三光遺跡や梨木遺跡と違った様相を呈している。堀ノ内遺跡では中期後半の曽利V式期に属する埋甕と土坑が確認されており、金地蔵遺跡では詳細な時期までは不明だが落し穴状の土坑、下長崎遺跡では後期前葉の堀之内式期に属する溝状遺構、夜長遺跡では前期末頃の土坑、東小山B遺跡では中期中葉の新道式期に属する土坑、南居遺跡はトレンチ2本を設定しての試掘調査によるものであるが、中期後半の曽利II～III式期に属する住居跡と土坑状の落ち込みが確認されている。

弥生時代では遺跡が扇央部や扇端部に立地するようになり、なかでも地下水位が高く、自然湧水がみられるような扇端部辺りに多くみられる。この時代の遺跡では身洗沢遺跡（28）の調査が行われており、後期の住居跡2軒と水田跡が確認されている。身洗沢遺跡は地下水位の高い扇端部から笛吹川の沖積地へと移行するあたりに立地する遺跡で、旧河道や浅谷などの微凹地に挟まれた細長い尾根状を呈する微高地上に小規模な集落が、微凹地に水田跡が営まれている様子が確認されており、当時の集落の在り方を考える上で貴重な存在となっている。

古墳時代では前期、中期の遺跡は規模も小さく、遺跡自体多くないが、後期になると遺跡が拡大し、その数も増加する傾向が窺える。

前期は弥生時代と同様に扇央部や扇端部に遺跡が立地しており、身洗沢遺跡、伊勢之宮遺跡（40）、金地蔵遺跡で調査が行われている。身洗沢遺跡は弥生時代後期から継続している遺跡で、住居跡、掘建柱建物跡、竪穴状遺構、土坑、溝状遺構、ピット群等が確認されている。伊勢之宮遺跡は、北1300番地より焼土や住居跡の床面がS字甕や壺などの遺物を伴って確認されたという記載が「八代町誌」にあり、真根子塚古墳の発掘調査の際にも溝状遺構やピットが確認されている。また、伊勢之宮遺跡の南東側に隣接する金地蔵遺跡でも住居跡や土坑が確認されている。

中期では本遺跡で住居跡が確認されているほかは、現在は下長崎遺跡となっているが、昭和61（1986）年から62（1987）年にかけて三光神遺跡として調査されたところから、遺物が多量に出土しているのが目につく程度である。しかし、中期の古墳として扇端部付近に立地する狐塚古墳（57）、扇央部に立地する団栗塚古墳（53）や真根子塚古墳（52）、扇状地内ではないが笛吹川の沖積地に立地する八幡塚古墳がみられることから、他にも遺跡が所在している可能性が窺われる。

後期になると、前期や中期に比べ集落の拡大化、拡散化傾向が強まり、前期や中期に集落がみられなか

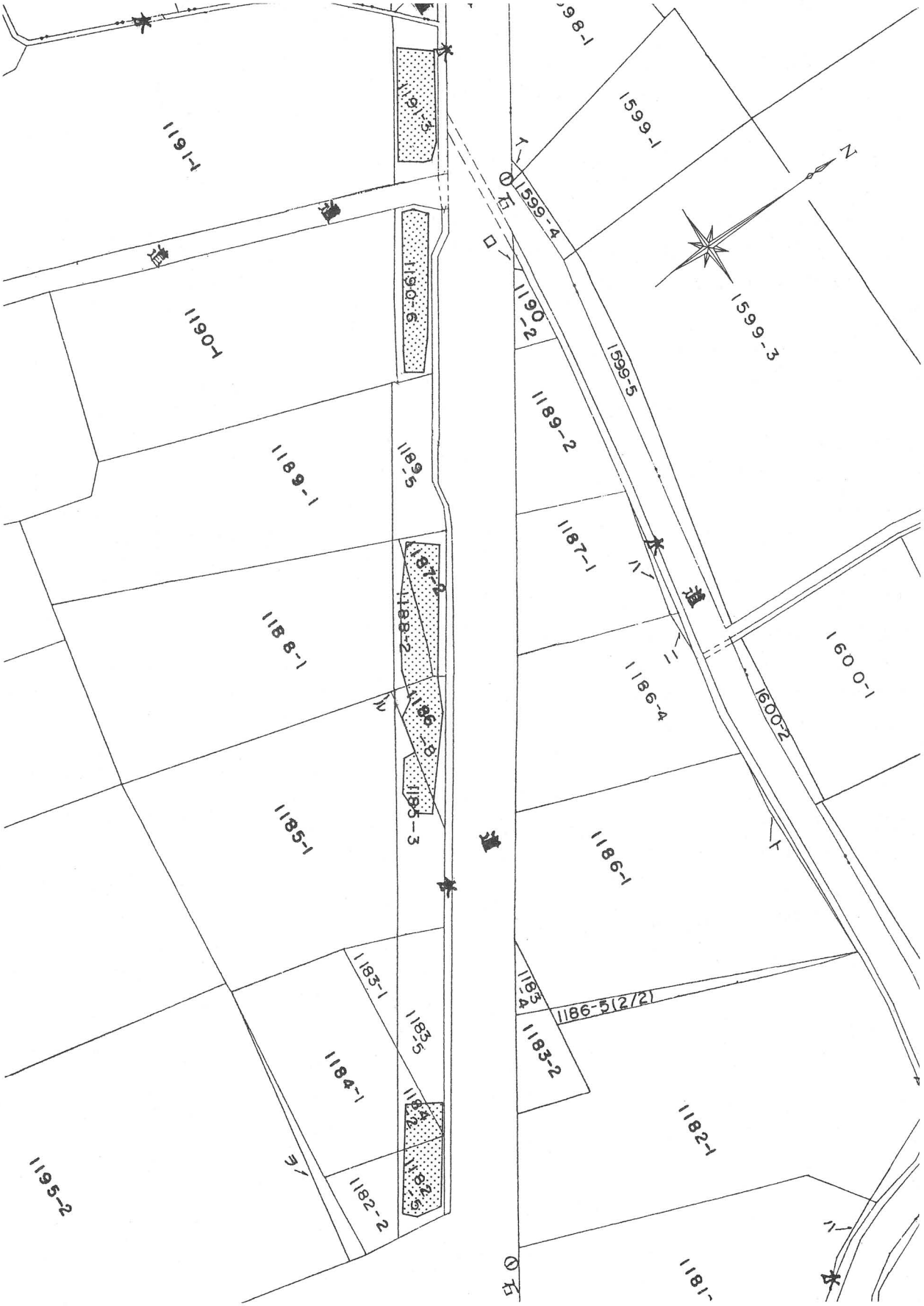
ったところにまで集落が広がっている。堀ノ内遺跡、八王子遺跡（41）、下長崎遺跡で住居跡等が確認されている。このうち、堀ノ内遺跡と下長崎遺跡では多くの住居跡が確認されていることから、比較的規模の大きな集落が営まれているようである。また、全長 10.9mの横穴式石室を有する地蔵塚古墳（48）、須恵器や銀製の鈴が出土した馬見塚古墳（46）、山梨県指定の考古資料が出土した古柳塚古墳（63）や御崎古墳、昭和 43（1968）年に調査された蝙蝠塚 1 号墳をはじめ、後期に築造された古墳が浅川右岸の自然堤防上を中心に、扇状地の扇頂部から扇央部にかけて多数みられる。

奈良・平安時代になると、古墳時代後期にみられた集落の拡大化、拡散化傾向がさらに強まり、扇状地一帯に遺跡の分布がみられる。古墳時代後期から続いている遺跡としては堀ノ内遺跡、八王子遺跡、下長崎遺跡があるが、これら以外にも大庭遺跡（30）、金地蔵遺跡、堀川遺跡、森の上南遺跡（45）、町屋遺跡（17）、夜長遺跡、四反田遺跡、東小山 B 遺跡、東小山 C 遺跡で住居跡や土坑、溝状遺構等の遺構が確認されている。また、扇状地の扇端部付近から笛吹川の沖積地にかけての広範囲なエリアを中心に、敷設時期がはっきりとしない面もあるが、平安時代後期から中世前期に敷設されたと考えられる条里制の地割跡が明瞭に残されている。

ところで、10 世紀前半に編纂された『和名類聚抄』には、当時の山梨県に所在していた郡郷名が記載されており、八代郡には長江、白井、沼尾、河合、八代の 5 郷が所在していると記載されている。この中で浅川扇状地上に所在していたと考えられているのが長江郷と八代郷で、長江郷は笛吹市八代町の永井がその遺称とされており、永井のほかに米倉、岡、増田地区あたりが想定されている。一方、八代郷は八代町の南、北、高家、竹居、奈良原、御坂町の竹居地区あたりが想定されている。

中世では小山城跡や武田信成館跡（31）、能成寺跡（33）が目を引く遺跡である。小山城は築城年代をはじめとして、城の詳細については確かな資料がなく定かでないが、伝承によると宝徳年間（1449～1451 年）に穴山伊豆守がこの城にいて武田信重を襲撃したといわれており、また、永正年間（1504～1520 年）には穴山伊予守信永の居城であったともいわれている。また、武田信成館跡は、現在、龍沙山清道院という寺院になっているが、信成が信州へ出陣中に攻められて館が落ち、夫人が館内にある井戸に身を投げたため、子の信春が応永 17（1410）年に母の菩提を弔うため、館跡に寺を創建したといわれている。能成寺跡は武田信守が貞和年間（1345～1349 年）に開いた寺の跡で、武田信玄によって甲府に移されるまでの間、信守の菩提寺となっていた。この寺跡からは、昭和 13（1938）年に宝筐印塔 10 基を含む 100 基近い五輪塔が発見されており、往時の繁栄を窺い知ることができる。

このように多くの遺跡が立地する浅川扇状地には、古代甲斐の国を通る主要な九本の古道、いわゆる甲斐九筋の中の一つである若彦路が東西に縦貫している。若彦路は甲府市の東部にある善光寺や酒折宮の周辺（旧板垣村）を起点にしたといわれており、国玉、七沢を通って笛吹川（明治 40 年の大水害以前は現在の平等川とほぼ同じ流路であった）を渡り、笛吹市石和町の東高橋、今井、小石和、笛吹市八代町の新浜、竹之内、高家、竹居、奈良原を経て鳥坂峠を越え、笛吹市芦川町新井原、上芦川へ、さらに大石峠を越えて南都留郡富士河口湖町の大石に出て、富士山西麓を南下して静岡県富士宮市の上井出へ、その後、春田道に合流して静岡県富士市吉原で東海道へと繋がっていた。この道については日本武尊が東国征伐の帰途に、甲斐の酒折宮へ立ち寄られた時に通ってきた道という伝説が残っている。また、鎌倉時代に編纂された『吾妻鏡』には、治承 4（1180）年 10 月に行われた源氏と平家による富士川の合戦の際に、甲斐源氏が軍を進めた道として若彦路という名が記載されている。このことから、古くから甲斐と駿河を結ぶ重要なルートとして整備された道となっており、多くの文物がこの道を通して甲府盆地にもたらされてきたことが窺い知れる。このため、甲府盆地の出入口にあたる浅川扇状地は、周辺の地域に比べて古くから開けており、盆地内でも古手で、しかも比較的規模の大きな古墳が多数所在し、古墳時代から平安時代にかけての規模の大きな集落跡、中世の城館跡等、重要な遺跡が多数みられ、笛吹市のみならず山梨県の歴史を解明する上で、欠くことのできない重要なエリアとなっている。



第３図　調査範囲図（S=1:500）

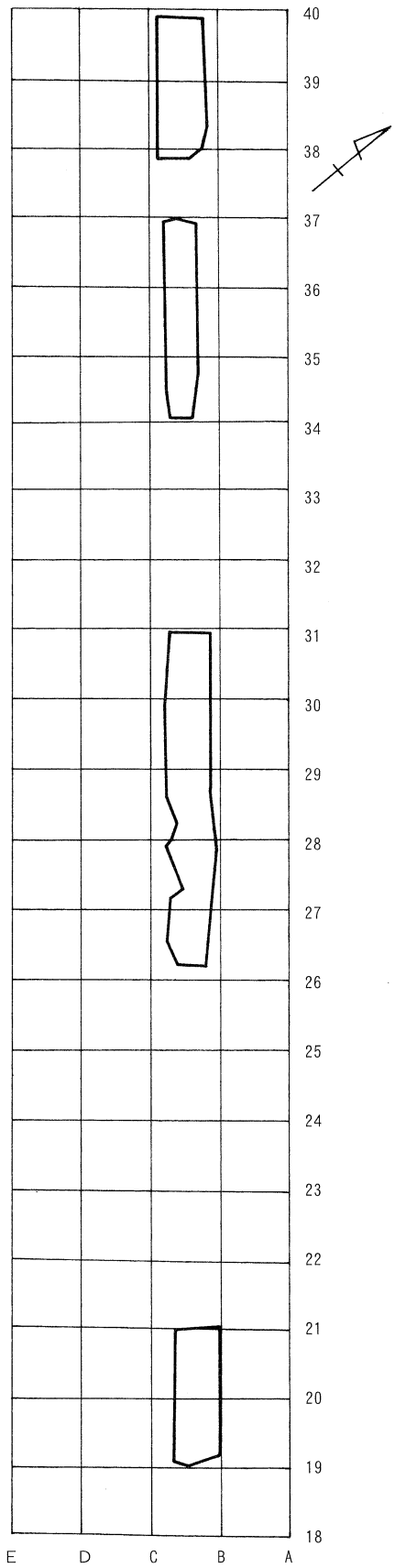
第Ⅲ章　調査の方法と層序

今回の発掘調査は、主要地方道甲府笛吹線の道路拡幅と歩道設置工事に伴うもので、調査範囲は幅が新たに道路や歩道となる部分で3～3.5m、長さが試掘調査によって埋蔵文化財の所在が明らかとなった約105mである。調査にあたっては一辺5mのグリッドを設定したが、このグリッドは、今回の調査区が平成13年度に調査された箇所と、幅約5mの市道を挟んで西側に続いているところであることから、平成13年度の調査時に設定されたグリッドを延長するような形で設定した（第4図）。このため、グリッドは東から西に向かって18・19・20～40の算用数字を、北から南に向かってA・B・C・D・Eのアルファベットを用いて呼称している。なお、調査区域の中でB21～B25グリッドおよびB31～B33グリッドにかけては、一般住宅や工務店の作業場、店舗兼住宅に必要な出入り口確保のため、また、B37グリッドは既存の道路で、生活用道路ばかりでなく、小・中学校への通学路にもなっていることから、今回は調査を行うことができなかった。

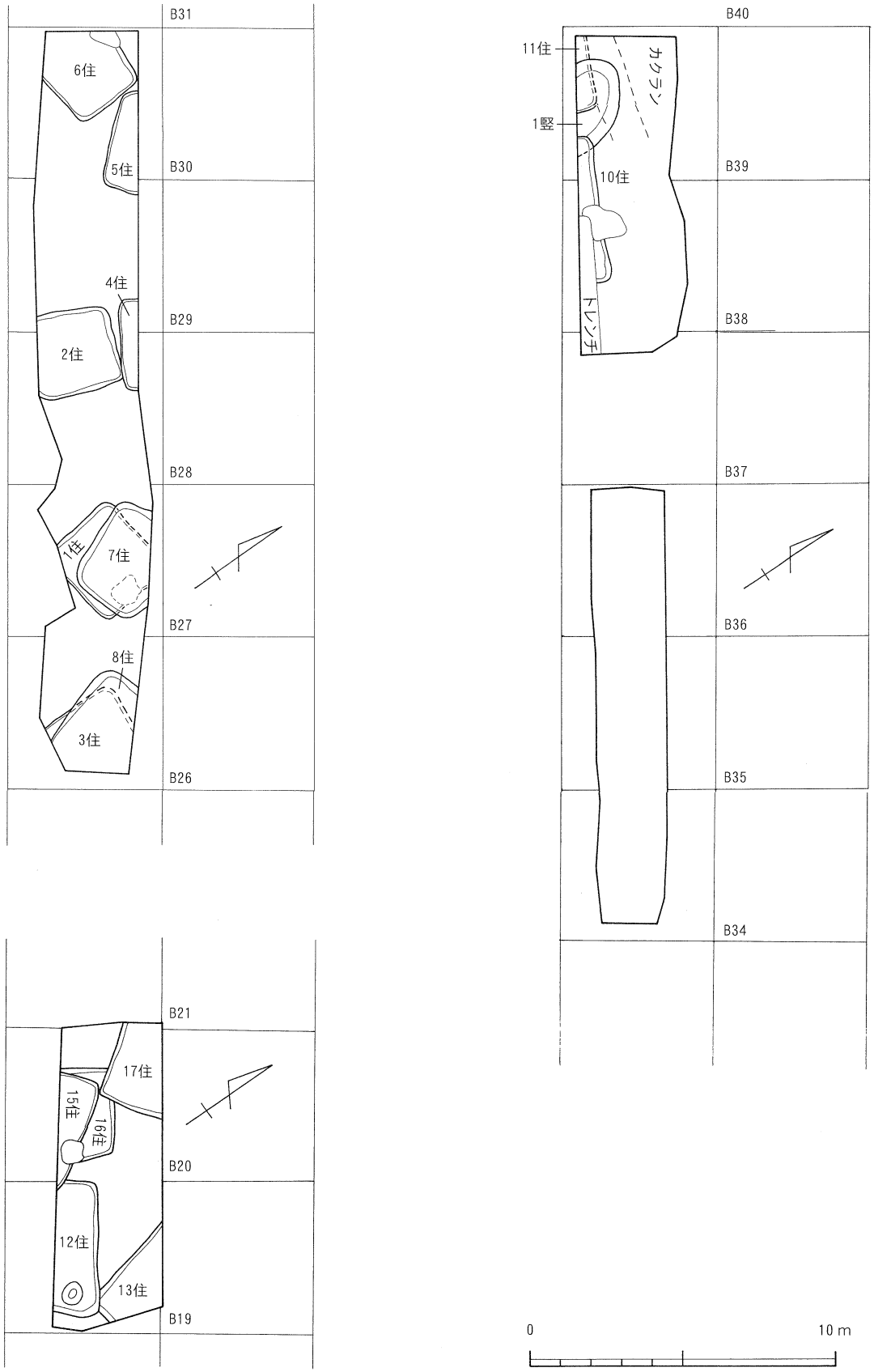
調査の方法としては、重機により表土を除去した後、人力で精査して遺構の検出作業を行い、その後、検出された各遺構の調査を行った。

本遺跡の基本層序は次に示す通りである。

Ⅰ層　表土層（耕作土）
Ⅱ層　暗茶褐色土（スコリア・赤褐色粒子を微量含む。）
Ⅲ層　黒茶褐色土（スコリア・カーボン・赤褐色粒子を含む。）
Ⅳ層　黄褐色砂（礫を含む。）



第4図　グリッド設定図（S=1:500）



第5図　遺構配置図（S=1：200）

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　古墳時代の遺構と遺物

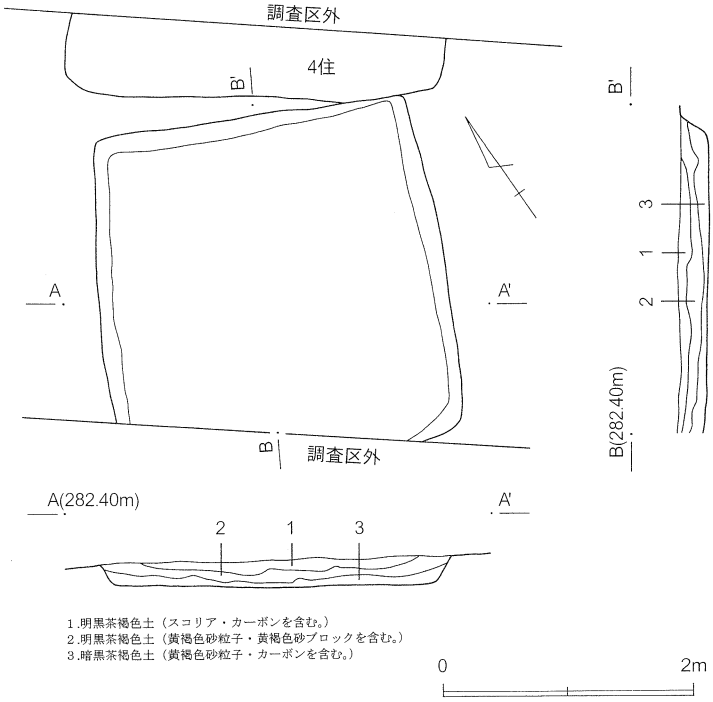
１．竪穴住居跡

２号住居跡（第６・７図、第１表）

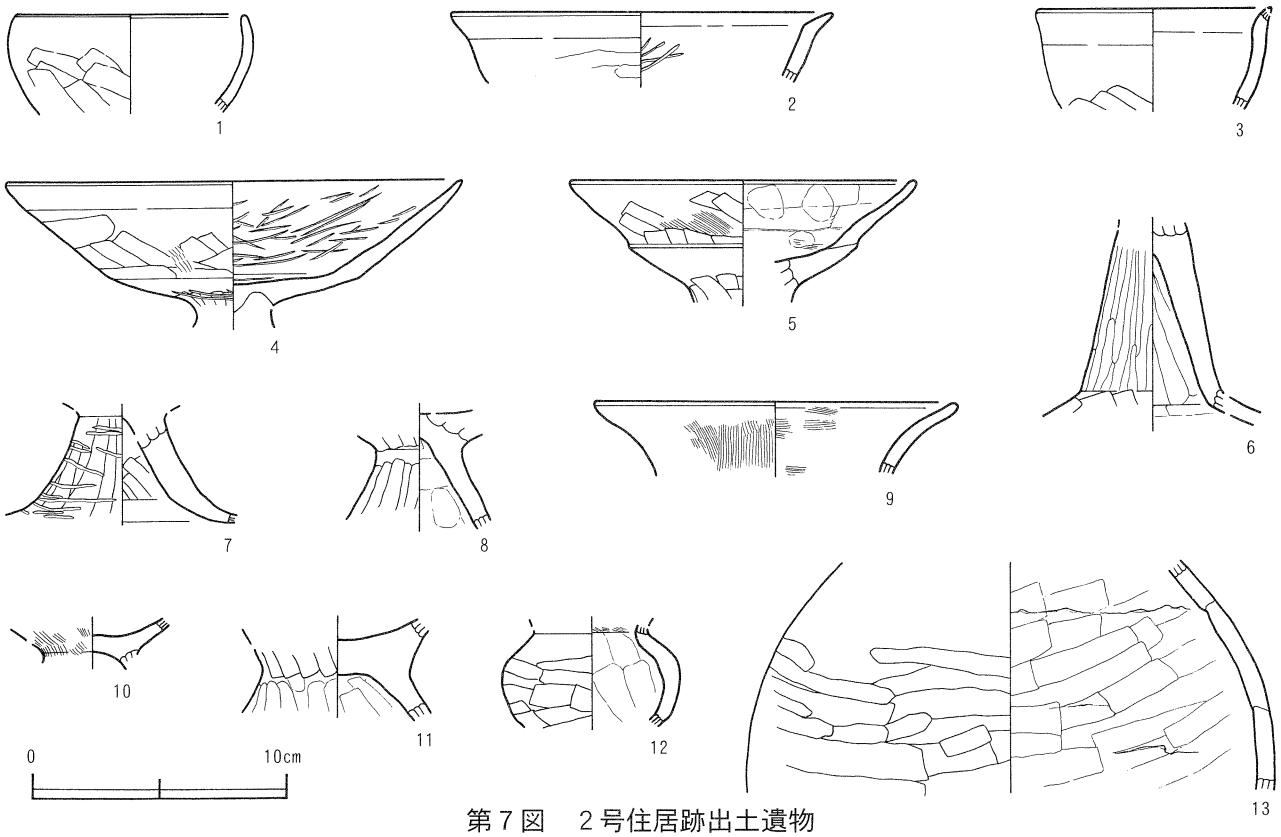
本住居跡はB－28・B－29グリッドに位置している。４号住居跡と重複しており、重複関係は４号住居跡によって北東コーナー付近が切られている。

南側が調査区外にあるため全貌は明らかでないが、平面形は方形を呈するものと思われ、現状の規模は東西2.8m、南北2.7mである。壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で22cmを測る。床は概ね平坦で、貼床や硬化した面は確認できなかったが、比較的しっかりとしている。カマドは確認されていない。

遺物は覆土中から土師器が多く出土している。図示できたものは13点で、坏（1・2）や埦（3）、高坏（4～8）、甕（9）、台付甕（10・11）、坩（12）、壷（13）がある。



第６図　２号住居跡



第７図　２号住居跡出土遺物

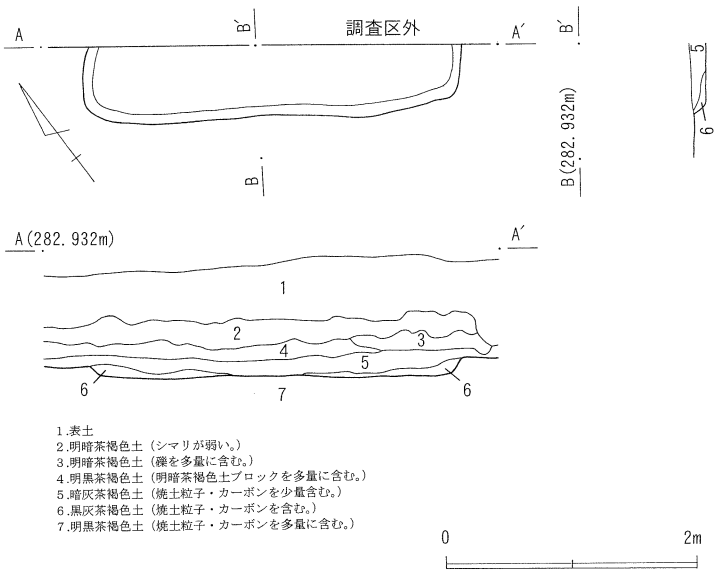
第１表　２号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器坏	－	口縁～胴部破片	口　(9.0)	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ	緻密(赤色粒子　白色粒子) 良好 明黄茶褐色	
2	土師器坏	－	口縁部破片	口　(15.0)	外面－ヘラケズリ 内面－ヘラミガキ	緻密(赤色粒子) 良好 黒茶褐色	
3	土師器埦	－	口縁～胴部破片	口　(9.2)	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ	粗い(砂粒) 良好 明赤茶褐色	外面磨耗
4	土師器高坏	20	口縁～胴部破片	口　(17.8)	外面－ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面－ヘラミガキ	緻密(赤色粒子　白色粒子) 良好 暗赤褐色	
5	土師器高坏	－	口縁～胴部破片	口　(13.6)	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ　指頭痕	緻密(赤色粒子　白色粒子) 良好 暗赤茶褐色	
6	土師器高坏	－	脚部のみ	－	外面－ヘラミガキ 内面－ナデ　シボリメ	緻密(赤色粒子　白色粒子) 良好 暗赤茶褐色	
7	土師器高坏	－	脚部破片	－	外面－ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面－ヘラケズリ　ナデ	緻密(赤色粒子　白色粒子) 良好 明黄茶褐色	
8	土師器高坏	－	脚部破片	－	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ　指頭痕	緻密(赤色粒子) 良好 淡赤茶褐色	
9	土師器甕	－	口縁部破片	口　(14.4)	外面－ハケ 内面－ハケ	密(金雲母　砂粒) 良好 黄茶褐色	
10	土師器台付甕	－	接合部	－	外面－ハケ	密(金雲母　砂粒) 良好 暗黄茶褐色	
11	土師器台付甕	－	接合部	－	外面－ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面－ナデ	密(赤色粒子　砂粒) 良好 黄茶褐色	
12	土師器坩	－	胴部破片	－	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ	密(赤色粒子　白色粒子) 良好 赤茶褐色	
13	土師器壷	－	胴部破片	－	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ	緻密(赤色粒子　砂粒) 良好 暗黄茶褐色	

４号住居跡（第８・９図、第２表）

本住居跡はＢ－28・Ｂ－29グリッドに位置している。２号住居跡と重複しており、重複関係は２号住居跡を切って構築している。

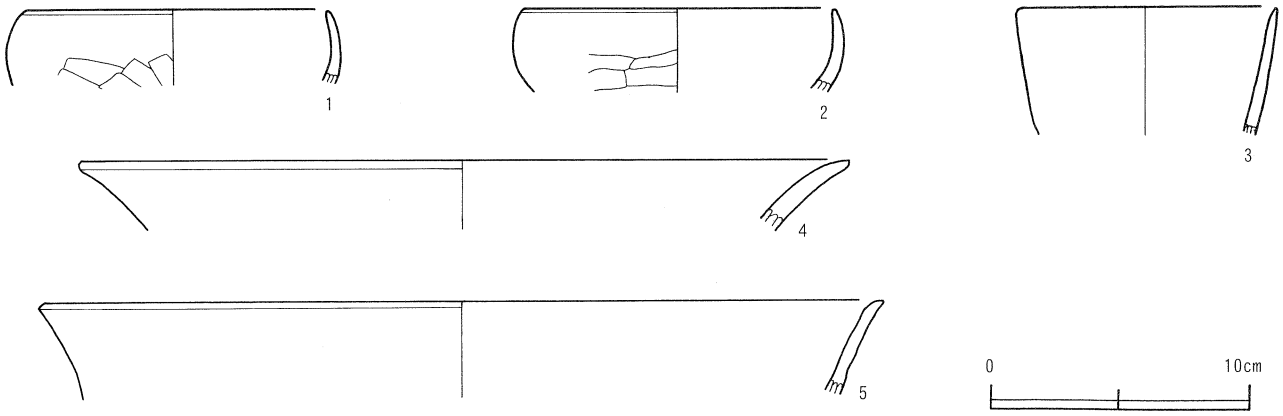
住居跡の南側が一部確認されたに留まったためその全貌は明らかでないが、確認できたところの形状から推測すると、平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈するものと思われ、現状の規模は東西3.0m、南北0.6mである。壁は確認された壁高が14cmと低いため、はっきりと言い切れない面もあるが、緩やかに立ち上がる傾向が窺える。床は概ね平坦で、貼床や硬化した面は確認できなかったが、比較的しっかりとしている。カマドは確認されておらず、調査区外に所在してい



第８図　４号住居跡

る可能性がある。

遺物は覆土中から土師器が多く出土している。図示できたものは5点で、坏（1・2）や坩（3）、甕（4・5）がある。



第9図　4号住居跡出土遺物

第2表　4号住居跡遺物観察表

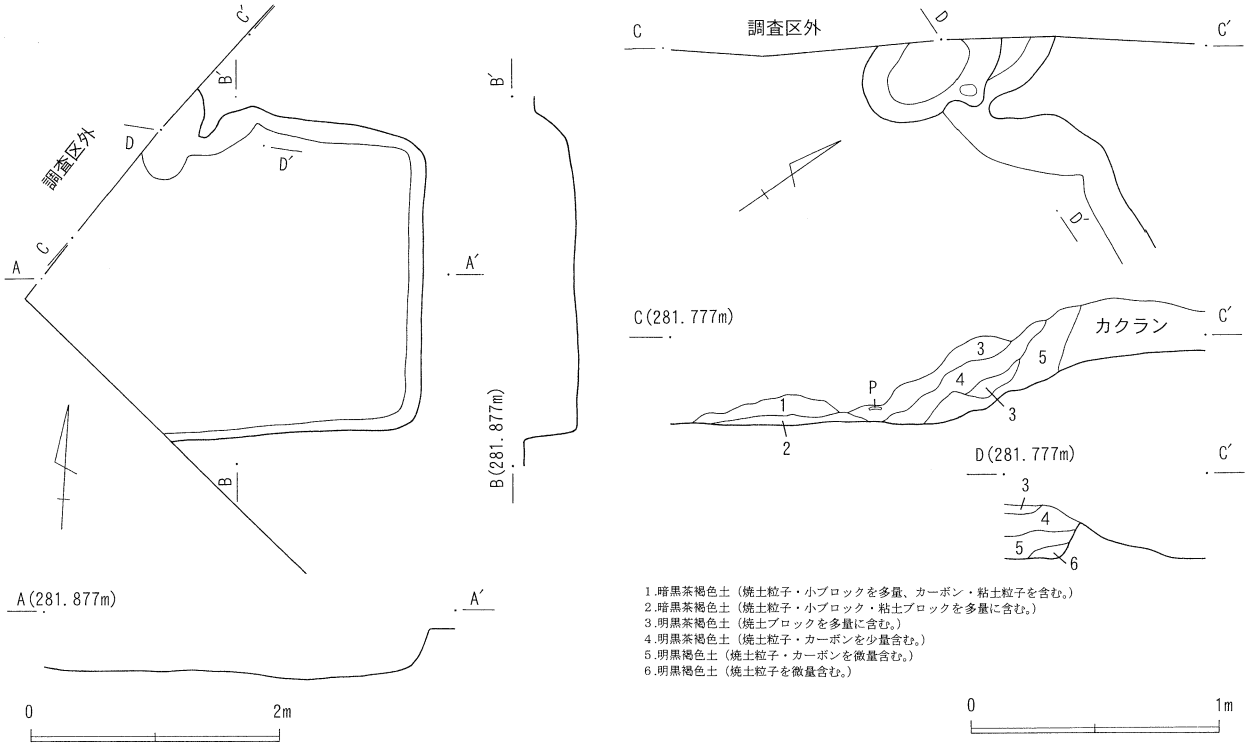
遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 坏	－	口縁部破片	口　(12.0)	外面－ナデ→ヘラケズリ 内面－ナデ	緻密(赤色粒子 金雲母) 良好 暗茶褐色	
2	土師器 坏	－	口縁部破片	口　(12.2)	外面－ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面－ヘラミガキ	緻密(赤色粒子 金雲母) 良好 暗茶褐色	
3	土師器 壷	－	口縁部破片	口　(10.0)	外面－ナデ 内面－ナデ	密(赤色粒子 金雲母) 良好 暗赤茶褐色	
4	土師器 甕	－	口縁部破片	口　(30.0)	外面－ナデ 内面－ナデ	やや粗い(金雲母 砂粒) 良好 明茶褐色	
5	土師器 甕	－	口縁部破片	口　(32.6)	外面－ナデ 内面－ナデ	やや粗い(金雲母 砂粒) 良好 淡茶褐色	

6号住居跡（第10・11図、第3表）

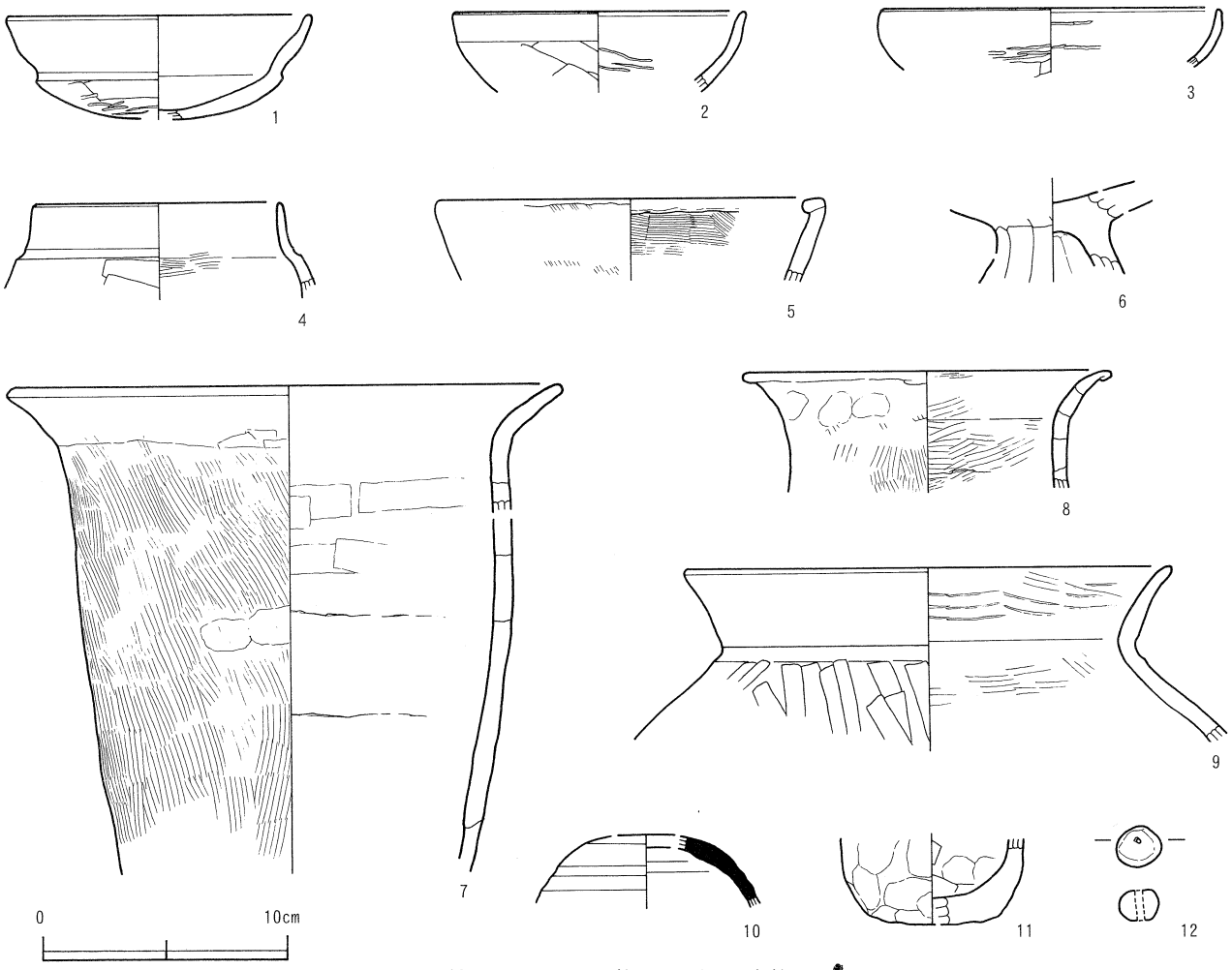
本住居跡はB－30グリッドに位置している。

西側が調査区外にあるため全貌は明らかでないが、平面形は隅丸長方形を呈するものと思われ、現状の規模は東西3.2m、南北2.6mである。壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で43cmを測る。床は多少の凸凹がみられるものの概ね平坦で、貼床は確認できなかったがカマドの周辺を中心に硬化していた。カマドは北壁に構築されており、約半分が調査区外に所在しているため全体的な規模はわからないが、現状確認できた規模は長さ76cm、幅35cmである。袖部に礫や粘土は確認できなかったが、砂質の地山を掘り残した部分がみられる。燃焼部には深さ4cm程度の掘り込みがあり、焼土はブロック状に検出されているが、明確な堆積は認められなかった。

遺物は土師器や須恵器、土製品が出土している。出土量は多く、図示できたものは12点で、土師器には坏（1～3）、埦（4）、甕（7～9）、鉢（5）、高坏（6）、手捏土器（11）、須恵器には蓋（10）、土製品には土玉（12）がある。この中で、甕（7）と土玉（12）はカマドの上から、坏（1）と甕（8）はカマドの周辺から出土している。



第10図　6号住居跡



第11図　6号住居跡出土遺物

第３表　６号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 坏	－	口縁～底部破片	口　(12.2) 高　(4.3)	外面－ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面－ヘラミガキ	緻密(白色粒子) 良好 暗黒茶褐色	内外面とも黒彩痕
2	土師器 坏	－	口縁部破片	口　(11.8)	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ→ヘラミガキ	緻密(赤色粒子　白色粒子) 良好 淡赤茶褐色	
3	土師器 坏	－	口縁部破片	口　(13.8)	外面－ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面－ヘラミガキ	緻密(赤色粒子) 良好 淡茶褐色	
4	土師器 埦	－	口縁部破片	口　(10.0)	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ	緻密(赤色粒子) 良好 明茶褐色	
5	土師器 鉢	－	口縁部破片	口　(15.6)	外面－ハケ→ナデ 内面－ハケ	緻密(砂粒) 良好 暗赤茶褐色	
6	土師器 高坏	－	接合部	－	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ	緻密(赤色粒子多) 良好 淡黄茶褐色	
7	土師器 甕	60	口縁～胴部	口　22.6	外面－ハケ 内面－ナデ	密(赤色粒子・砂粒多) 良好 淡赤茶褐色	激しいゆがみあり
8	土師器 甕	－	口縁部破片	口　(15.0)	外面－ハケ　指頭痕 内面－ハケ	密(赤色粒子　砂粒) 良好 淡赤茶褐色	
9	土師器 甕	－	口縁部破片	口　(19.8)	外面－ヘラケズリ 内面－ハケ→ナデ	密(赤色粒子　金雲母　砂粒) 良好 淡茶褐色	
10	須恵器 蓋	－	口縁部破片	口　(12.2)	外面－ロクロ整形 内面－ロクロ整形	緻密(白色粒子) 良好 暗灰褐色	
11	手捏土器	－	体部破片	底　(3.8)	外面－ナデ 内面－ヘラケズリ　ナデ 底部－ナデ	緻密(白色粒子) 良好 暗褐色	

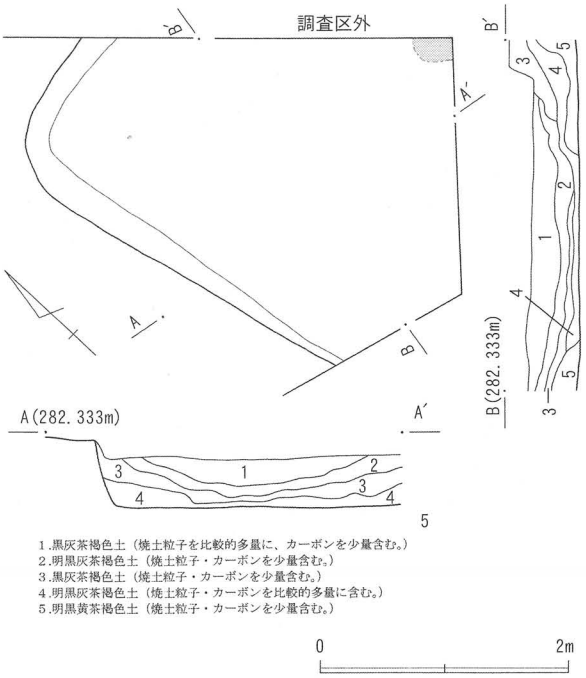
遺物番号	品名	出土位置	状　態	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量（g）	備　考
12	土玉	６号住	完形	1.7	1.8	1.2	4.2	

８号住居跡（第 12・13 図、第４表）

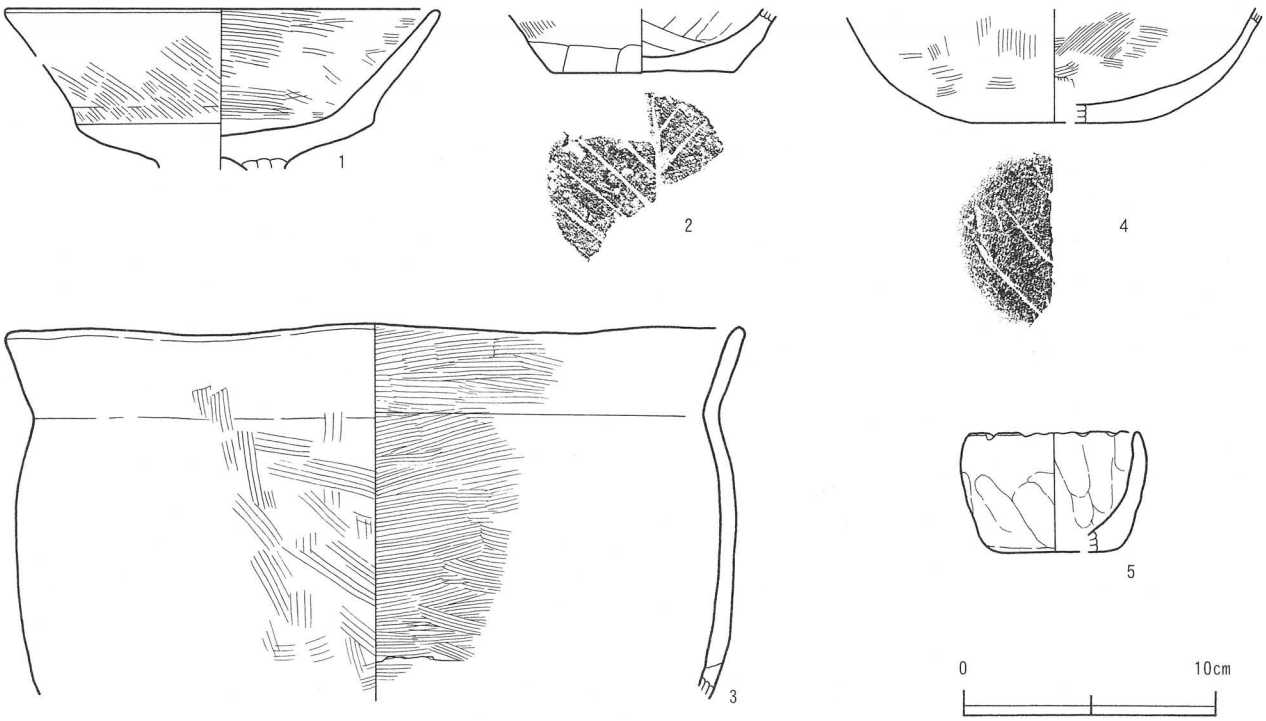
本住居跡はＢ－26 グリッドに位置している。３号住居跡と重複しており、重複関係は３号住居跡によって切られている。

住居跡の大半が調査区外にあるため全貌は明らかでないが、確認できたところの形状から推測すると、平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈するものと思われ、現状の規模は東西 2.6m、南北 3.6m である。壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で 42cm を測る。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかったが、ところどころで硬化した面が確認された。カマドは確認されておらず、調査区外に所在している可能性がある。

遺物は覆土中から土師器や須恵器が出土している。出土量は多いが小破片のものが多く、図示できたものは土師器のみ５点で、高坏（1）や甕（2・3）、壷（4）、手捏土器（5）がある。



第 12 図　８号住居跡



第13図　8号住居跡出土遺物

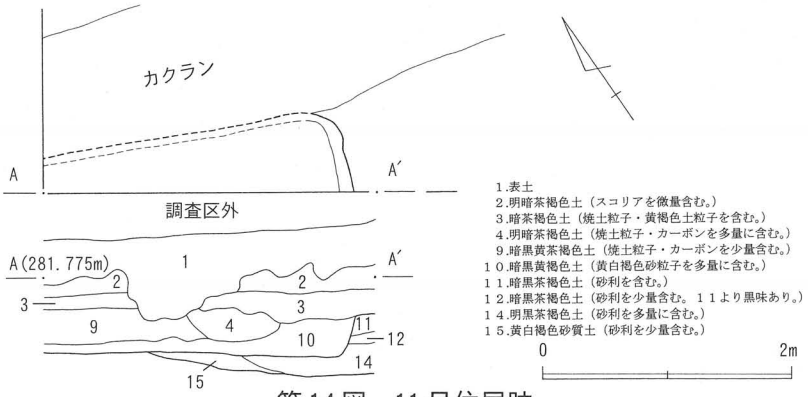
第4表　8号住居跡遺物観察表

	種別 器種	残存 (%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 高坏	50	口縁～ 胴部 破片	口　(17.0)	外面－ハケ→ナデ 内面－ハケ→ナデ	緻密(赤色粒子　白色粒子) 良好 暗赤茶褐色	
2	土師器 甕	－	底部 破片	底　　7.2	外面－ハケ→ヘラケズリ 内面－ヘラケズリ→ナデ 底部－木葉痕	密(砂粒) 良好 淡茶褐色	
3	土師器 甕	－	口縁部 破片	口　(29.0)	外面－ハケ 内面－ハケ	やや粗い(砂粒) 良好 黄茶褐色（一部黒褐色）	
4	土師器 壷	－	底部 破片	底　(6.6)	外面－ハケ→ナデ 内面－ハケ→ナデ 底部－木葉痕	やや粗い(赤色粒子　砂粒) 良好 明赤茶褐色（一部黒褐色）	
5	手捏土器	25	口縁～ 底部 破片	口　(6.6) 高　4.8 底　(4.6)	外面－ナデ 内面－ナデ 底部－ナデ	緻密(赤色粒子　白色粒子) 良好 淡赤茶褐色（一部黒茶褐色）	

11号住居跡（第14・15図、第5表）

本住居跡はB－39 グリッドに位置している。1 号竪穴状遺構と重複しており、重複関係は1号竪穴状遺構を切って構築している。

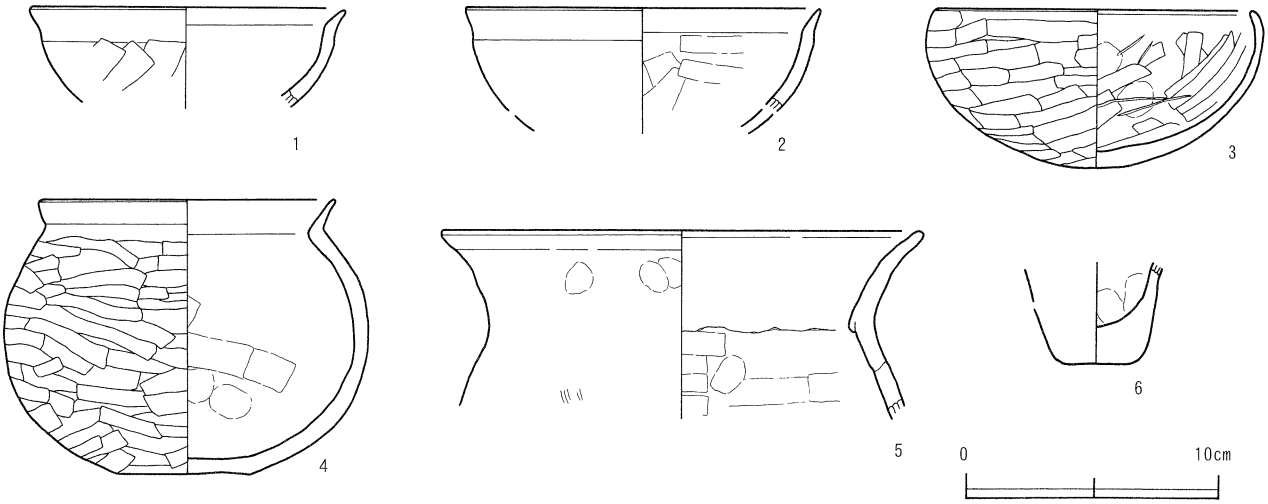
住居跡の大半が調査区外に所在しており、北壁も後世の溝状の掘り込みによって破壊されていることからその全貌は明らかでないが、平面形は確認できたところの形状から推測すると隅丸方形または隅丸長方形を呈するものと思われ、



第14図　11号住居跡

現状の規模は東西 2.4m、南北 0.7mである。壁はやや急角度で立ち上がっており、壁高は最大で 32cm を測る。床は平坦で、貼床や硬化した面は確認できなかった。カマドは確認されておらず、調査区外に所在している可能性がある。

遺物は覆土中から土師器が出土している。出土量は多いとはいえず、図示できたものは 6 点で、坏（1～3）や埦（4）、甕（5）、手捏土器（6）がある。



第 15 図　11 号住居跡出土遺物

第 5 表　11号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器坏	－	口縁～胴部破片	口　(12.4)	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ	緻密(赤色粒子多) 良好 明赤茶褐色	
2	土師器坏	－	口縁～胴部破片	口　(14.0)	外面－ヘラケズリ（不明瞭） 内面－ナデ	緻密(赤色粒子 白色粒子) 良好 赤黄褐色	外面磨耗
3	土師器坏	95	口縁～底部	口　12.6 高　6.3 底　2.2	外面－ヘラケズリ　ヘラミガキ 内面－ヘラケズリ　ヘラミガキ 底部－ヘラケズリ	緻密(赤色粒子 金雲母) 良好 にぶい橙色	
4	土師器埦	75	口縁～底部	口　11.8 高　10.9 底　5.3	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ　指頭痕 底部－ヘラケズリ	緻密(赤色粒子 金雲母) 良好 にぶい橙色	
5	土師器甕	－	口縁部破片	口　(19.0)	外面－ナデ 内面－ナデ	密(金雲母　砂粒) 良好 明茶褐色	
6	手捏土器	－	胴部～底部	底　3.0	外面－ナデ 内面－ナデ	密(白色粒子多) 良好 暗茶褐色	

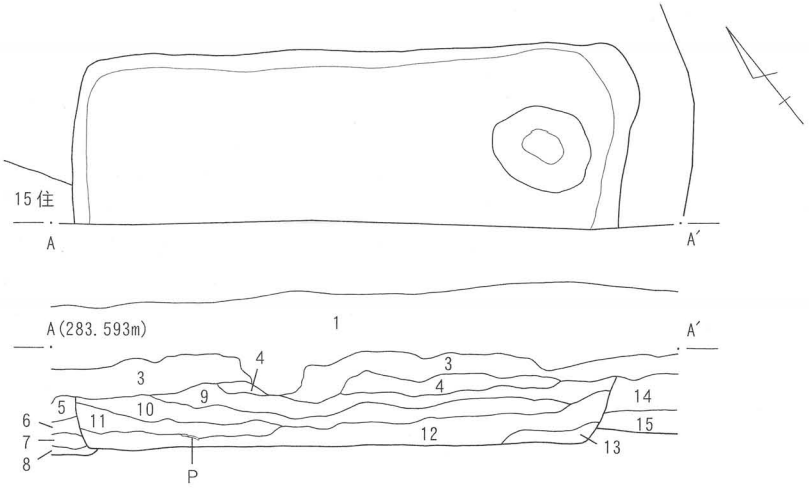
12 号住居跡（第 16 図・第 17 図、第 6 表）

本住居跡はB－19 グリッドに位置している。13 号住居跡、15 号住居跡と重複しており、これらとの重複関係は 13 号住居跡には切られているものの、15 号住居跡に対してはこれを切って構築している。

南側が調査区外にあるため全貌は明らかでないが、確認できたところの形状から推測すると、平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈するものと思われ、現状の規模は東西 4.5m、南北 0.9mである。壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で 54cm を測る。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかったが、全体的に硬化していた。カマドは確認されておらず、調査区外に所在している可能性がある。

その他の付属施設としては土坑が 1 基確認されている。この土坑は住居の北東コーナー付近で検出されており、規模は長径 80cm、短径 66cm、深さ 25cm を有する。

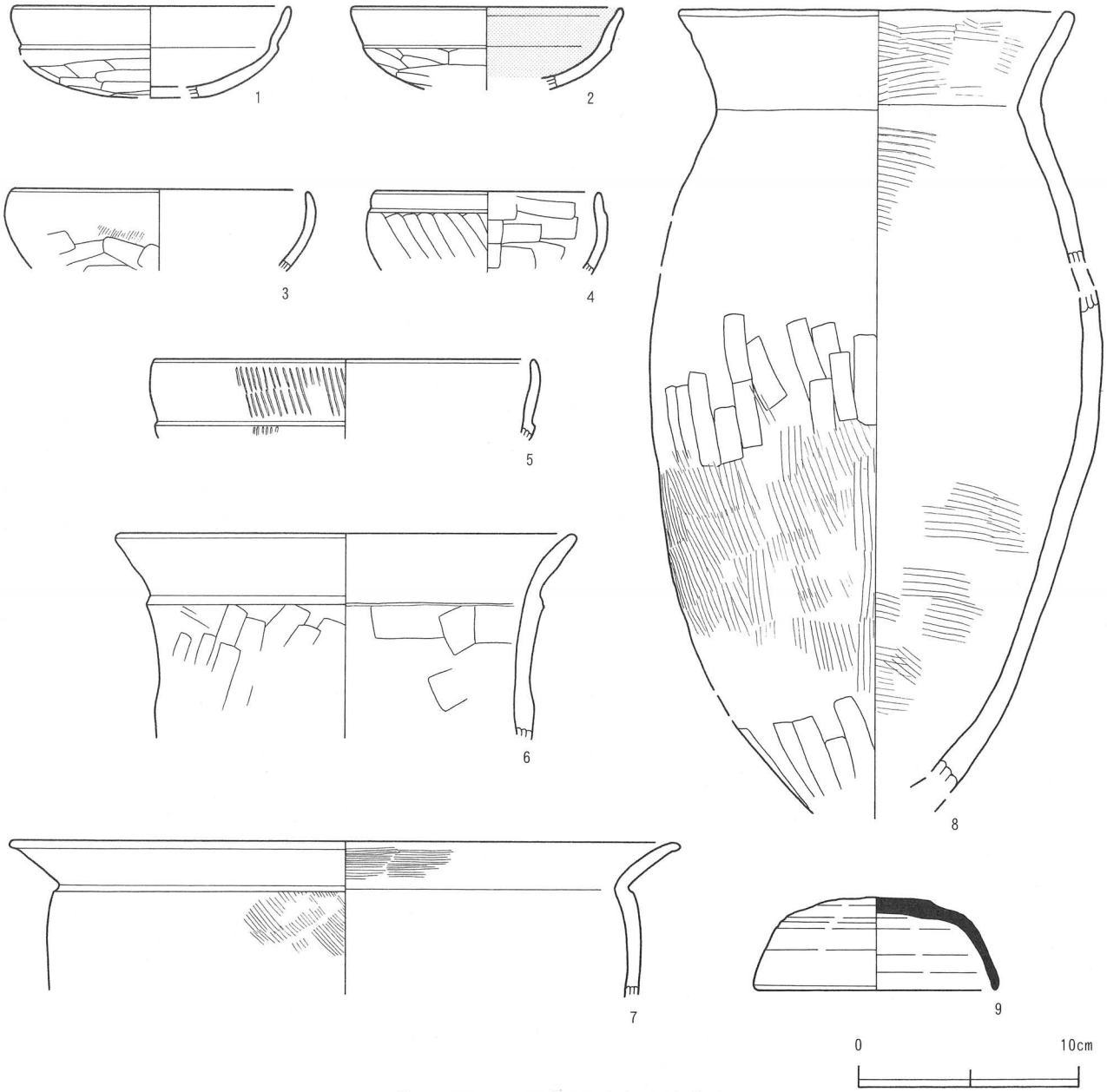
遺物は覆土中から土師器や須恵器が出土している。出土量は多く、図示できたものは 9 点で、土師器には坏（1～3）や埦（4・5）、甕（6～8）、須恵器には蓋（9）がある。



1.表土
3.明黒茶褐色土（明暗茶褐色土ブロックを多量に含む。）
4.暗黒茶褐色土（明暗茶褐色土ブロックを少量含む。）
5.明黒茶褐色土（焼土粒子を少量含む。）
6.明黒茶褐色土（焼土粒子を少量含む。５より黒味が強い。）
7.暗黒茶褐色土（黒褐色土粒子を比較的多量に含む。）
8.暗黒茶褐色土（灰茶褐色粘土・焼土粒子・ブロックを多量に含む。）
9.暗黒褐色土（暗茶褐色土ブロックを少量含む。）
１０.明黒褐色土（暗茶褐色土ブロック・焼土粒子・カーボンを少量含む。）
１１.明黒褐色土（焼土粒子を少量、カーボンを含む。）
１２.明黒褐色土（焼土粒子を少量、黄茶褐色砂粒子を比較的多量に、カーボンを含む。）
１３.明黒灰褐色土（黄灰褐色砂粒子を多量に含む。）
１４.明黒茶褐色土（焼土粒子・カーボンを含む。）
１５.明黒茶褐色土（黄灰褐色砂粒子を多量に含む。）

0　2m

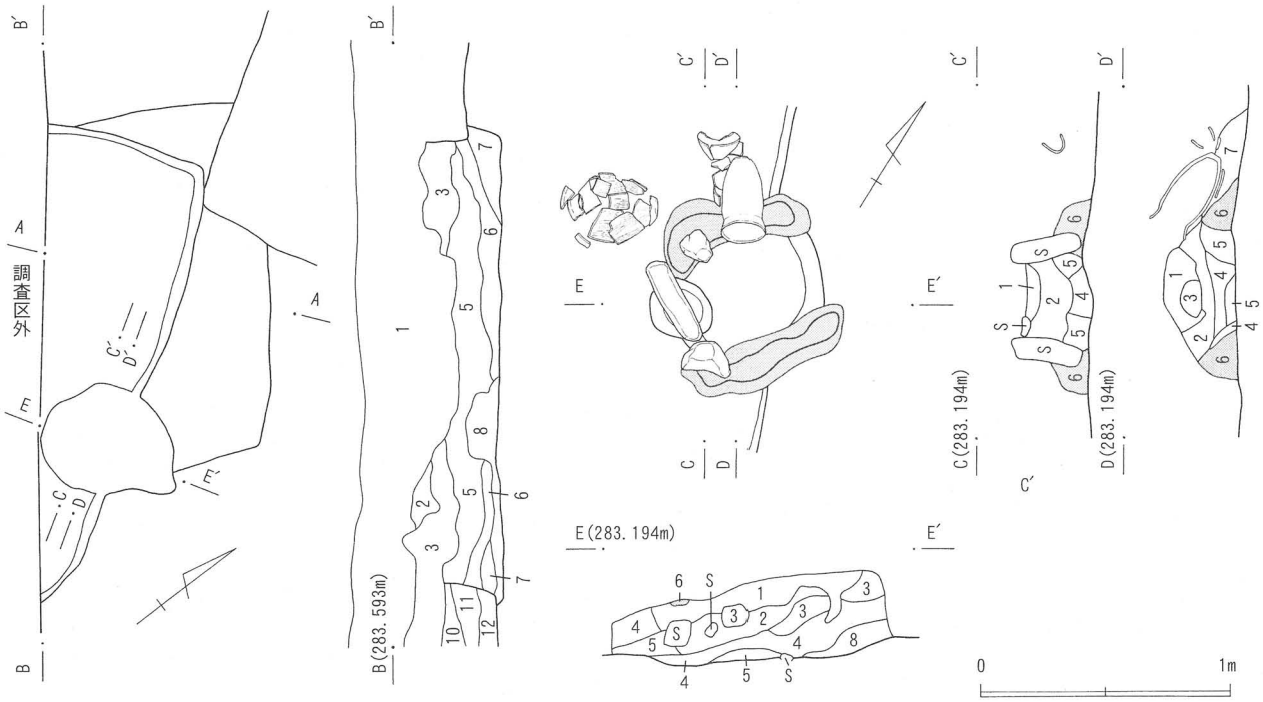
第16図　12号住居跡

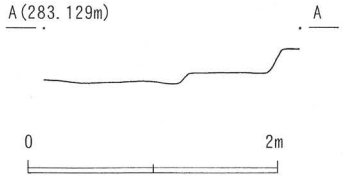


第17図　12号住居跡出土遺物

第６表　12号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 坏	60	口縁～底部	口　(12.4) 高　4.2	外面－ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面－ヘラミガキ	緻密(赤色粒子　金雲母) 良好 暗褐色	
2	土師器 坏	30	口縁～胴部破片	口　(12.2)	外面－ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面－ヘラミガキ	緻密(赤色粒子　金雲母) 良好 外-淡茶褐色　内-黒色	内面黒色処理
3	土師器 坏	－	口縁～胴部破片	口　(13.2)	外面－ハケ→ヘラケズリ 内面－ナデ	緻密(赤色粒子　金雲母) 良好 赤褐色	内外面とも赤彩痕
4	土師器 埦	－	口縁～胴部破片	口　(10.2)	外面－ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面－ヘラケズリ	緻密(赤色粒子多) 良好 淡茶褐色	
5	土師器 埦	－	口縁部破片	口　(17.2)	外面－ヘラミガキ 内面－ナデ	緻密(赤色粒子　金雲母) 良好 黒褐色	
6	土師器 甕	－	口縁～胴部破片	口　(20.6)	外面－ヘラケズリ 内面－ヘラケズリ	やや粗い(金雲母　砂粒) 良好 明茶褐色	
7	土師器 甕	－	口縁部破片	口　(30.0)	外面－ハケ 内面－ハケ　ナデ	やや粗い(金雲母　砂粒) 良好 暗茶褐色	
8	土師器 甕	90	口縁～胴部	口　17.8	外面－ヘラケズリ　ハケ 内面－ハケ	やや粗い(白色粒子) 良好 明茶褐色	外面一部黒く変色
9	須恵器 蓋	55	口縁～体部	口　(10.8) 高　4.3	外面－ロクロ整形 内面－ロクロ整形	緻密(白色粒子) 良好 灰褐色	

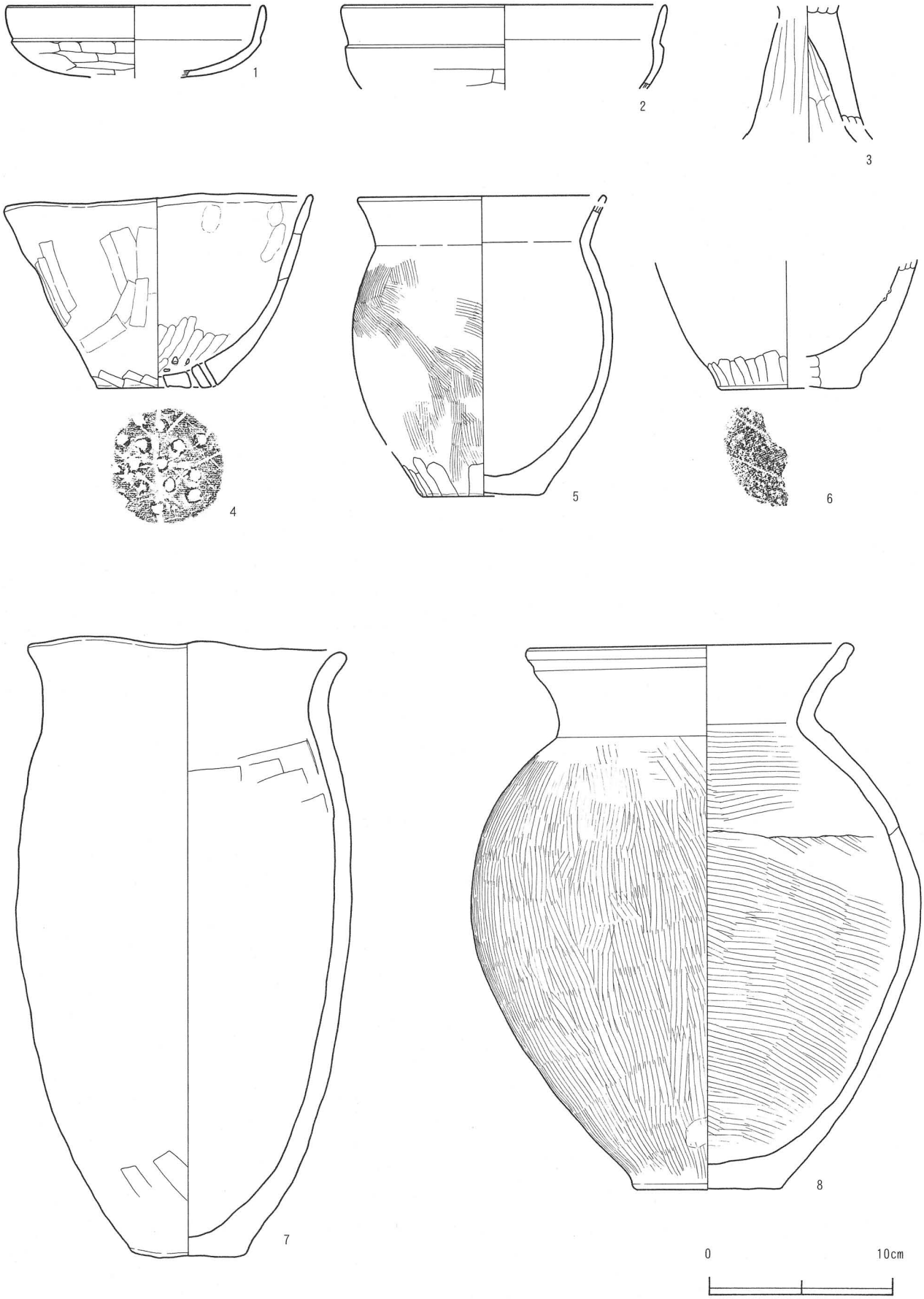




1.表土
2.明暗茶褐色土（シマリなし。）
3.明黒茶褐色土（明暗茶褐色土ブロックを多量に含む。）
5.明黒茶褐色土（焼土粒子を少量含む。）
6.明黒茶褐色土（焼土粒子を少量含む。５より黒味が強い。）
7.暗黒茶褐色土（黒褐色土粒子を比較的多量に含む。）
8.暗黒茶褐色土（灰茶褐色粘土・焼土粒子・ブロックを多量に含む。）
１０.明黒褐色土（暗茶褐色土ブロック・焼土粒子・カーボンを少量含む。）
１１.明黒褐色土（焼土粒子を少量、カーボンを含む。）
１２.明黒褐色土（焼土粒子を少量、黄茶褐色砂粒子を比較的多量に、カーボンを含む。）

15住カマド
1.明黒茶褐色土（焼土粒子・粘土ブロックを少量含む。）
2.明黒茶褐色土（焼土粒子・粘土ブロックを多量に含む。）
3.焼土
4.暗茶褐色土（焼土粒子を多量に、粘土ブロックを少量含む。）
5.暗黒茶褐色土（焼土粒子を微量に含む。）
6.灰茶褐色粘土
7.暗黒褐色土
8.明黒茶褐色土（１６号住覆土。）

第18図　15号住居跡



第19図　15号住居跡出土遺物

第７表　15号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器坏	20	口縁～底部破片	口 (13.8) 高 3.8 底 (7.6)	外面－ヘラケズリ 内面－ヘラミガキ 底部－ヘラケズリ	密(赤色粒子　金雲母) 良好 暗茶褐色	
2	土師器坏	－	口縁部破片	口 (17.4)	外面－ヘラケズリ 内面－ヘラミガキ	緻密(赤色粒子　金雲母少) 良好 明赤褐色	
3	土師器高坏	－	脚部	－	外面－ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面－ナデ　シボリメ	密(赤色粒子　白色粒子) 良好 橙色	
4	土師器甑	90	口縁～底部	口 16.8 高 10.5 底 6.3	外面－ナデ　ヘラケズリ 内面－ヘラミガキ　指頭痕 底部－木葉痕（穿孔15ヶ所）	やや粗い(赤色粒子　砂粒) 良好 暗茶褐色	
5	土師器小型甕	40	口縁～底部	口 (13.4) 高 16.3 底 6.6	外面－ハケ　ヘラケズリ 内面－ナデ 底部－ヘラケズリ	密(砂粒多) 良好 暗赤茶褐色	
6	土師器甕	－	底部破片	底 (7.6)	外面－ナデ→ヘラケズリ 内面－ナデ 底部－木葉痕	やや粗い(赤色粒子　金雲母砂粒) 良好 明茶褐色	
7	土師器甕	100	完形	口 16.8 高 33.4 底 5.8	外面－ナデ→ヘラケズリ(一部) 内面－ナデ→ヘラケズリ(一部) 底部－木葉痕（剥落）	やや粗い(赤色粒子　砂粒小石) 良好 暗茶褐色	
8	土師器甕	90	口縁～底部	口 17.6 高 29.5 底 8.0	外面－ハケ 内面－ハケ 底部－ナデ	密(金雲母　砂粒) 良好 明黒茶褐色	

15号住居跡（第18・19図、第７表）

本住居跡はＢ－19・Ｂ－20グリッドに位置している。12号住居跡、16号住居跡と重複しており、これらとの重複関係は12号住居跡には切られているものの、16号住居跡に対してはこれを切って構築している。

南側の大半が調査区外にあるため全貌は明らかでないが、確認できたところの形状から推測すると、平面形は方形または長方形を呈するものと思われ、現状の規模は東西3.7m、南北1.3mである。壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で46cmを測る。床は若干の凸凹がみられるが概ね平坦で、貼床は確認できなかったが、カマドの周辺が硬化している。カマドは北壁に構築されており、長さ70cm、幅80cmの規模を有する。袖部は焚き口の左右に１個づつ袖石を立てて芯としており、灰褐色粘土を貼付けて構築している。天井部は崩落しており、カマドの前から天井石に用いられていたと思われる長さ70cmの礫が横たわって検出された。燃焼部には深さ5cm程度の掘り込みがあり、焼土はブロック状に検出されているが、明確な堆積では認められなかった。

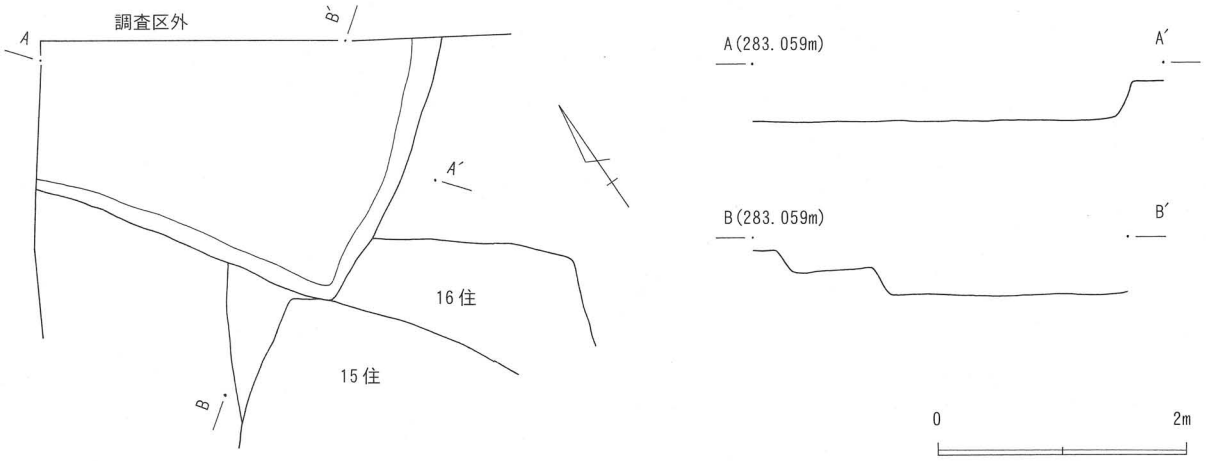
遺物は土師器が出土している。出土量は比較的多く、図示できたものは８点で、坏（1・2）や高坏（3）、甕（5～8）、甑（4）がある。この中で、甕（7）と甑（4）はカマドの左側に横たわるような形で出土し、甕（8）はカマドの左前から潰れた状態で出土している。

17号住居跡（第20・21図、第８・９表）

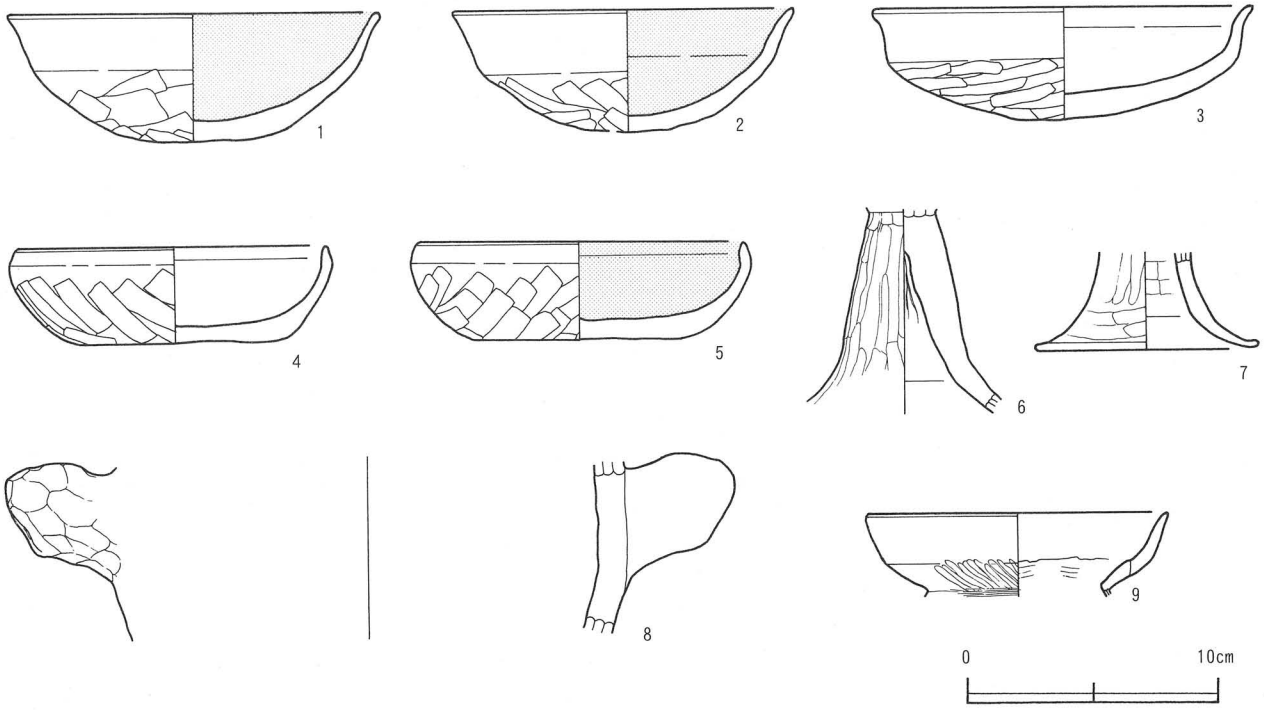
本住居跡はＢ－20・Ｂ－21グリッドに位置している。16号住居跡と重複しており、重複関係は16号住居跡を切って構築している。

今回の調査では住居跡の南東側が一部調査されるに留まったためその全貌は明らかでないが、確認できたところの形状から推測すると、平面形は方形または長方形を呈するものと思われ、現状の規模は東西3.1m、南北2.2mである。壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で32cmを測る。床は概ね平坦で、貼床や硬化した面は確認できなかったが、比較的しっかりとしている。カマドは確認されておらず、調査区外に所在している可能性がある。

遺物は覆土中より土師器が出土している。図示できたものは９点で、坏（1～5）、高坏（6・7）、甑（8）、壷（9）がある。この中で、坏（3・4）の２点は完形のものである。



第20図　17号住居跡



第21図　17号住居跡出土遺物

第８表　17号住居跡遺物観察表（１）

遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 坏	90	口縁～底部	口 14.8 高 5.1 底 4.5	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ 底部－ヘラケズリ	緻密(赤色粒子 白色粒子 金雲母) 良好 外-明赤茶褐色　内-黒色	内面黒色処理
2	土師器 坏	80	口縁～底部	口 13.6 高 4.9	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ	緻密(赤色粒子 白色粒子) 良好 外-明赤茶褐色　内-黒色	内面黒色処理
3	土師器 坏	100	完形	口 15.0 高 4.5	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ	緻密(白色粒子多) 良好 明赤茶褐色	

第９表　17号住居跡遺物観察表（２）

遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
4	土師器 坏	100	完形	口 12.3 高 3.8 底 8.0	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ 底部－ナデ	緻密(白色粒子 金雲母 黒雲母) 良好 暗赤茶褐色	
5	土師器 坏	90	口縁～底部	口 13.0 高 3.9 底 8.0	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ 底部－ナデ	緻密(赤色粒子 白色粒子 黒雲母) 良好 外-明赤茶褐色 内-黒色	内面黒色処理
6	土師器 高坏	－	脚部破片	－	外面－ヘラミガキ 内面－ナデ シボリメ	緻密(赤色粒子多) 良好 明黄茶褐色	
7	土師器 高坏	－	脚部破片	底 (9.0)	外面－ヘラミガキ 内面－ヘラケズリ→ナデ	緻密(砂粒) 良好 暗茶褐色	
8	土師器 甑	－	把手部のみ	－	外面－指頭痕 内面－ナデ	密(砂粒) 良好 明黄茶褐色	
9	土師器 壷	－	口縁部破片	口 (12.0)	外面－ヘラミガキ 内面－ナデ	緻密(砂粒) 良好 明茶褐色	

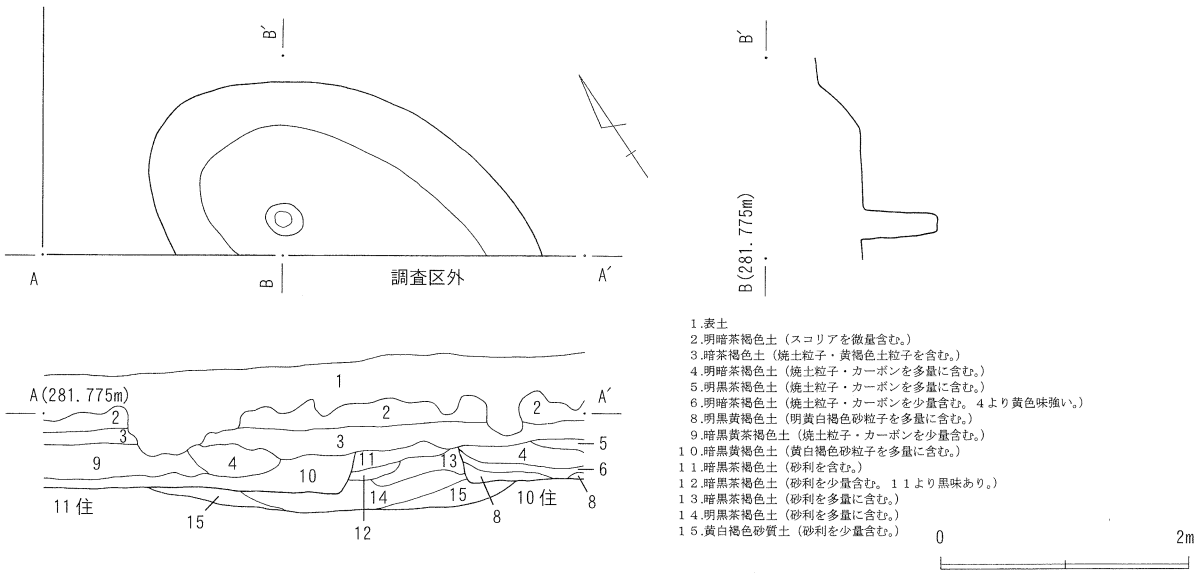
２．竪穴状遺構

１号竪穴状遺構（第22・23図、第10表）

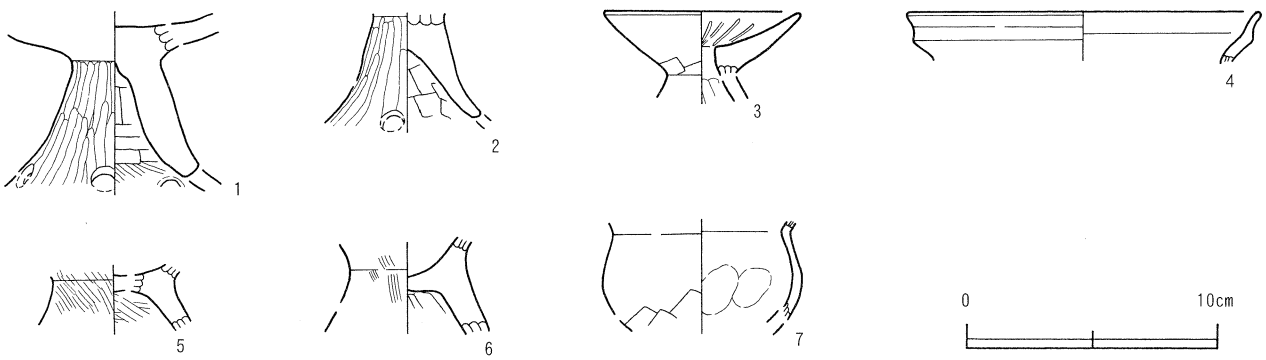
本竪穴状遺構はＢ－39グリッドに位置している。10号住居跡、11号住居跡と重複しており、重複関係はこれらの遺構によって切られている。

南西側が調査区外にあるため全貌は明らかでないが、確認できたところの形状から推測すると、平面形は楕円形を呈するものと思われ、現状の規模は東西1.6m、南北2.0mである。確認された遺構の深さは最大52cmで、覆土には砂利を多く含んでいる。また、遺構の底からは径32cm、深さ60cmのピットが１基確認されている。

遺物は覆土中より土師器が多量に出土している。小さい破片のものや磨耗しているものが多いため、図示できたものは７点で、高坏（1・2）、器台（3）、Ｓ字状口縁台付甕（4）、台付甕（5・6）、壷（7）がある。



第22図　１号竪穴状遺構



第23図　1号竪穴状遺構出土遺物

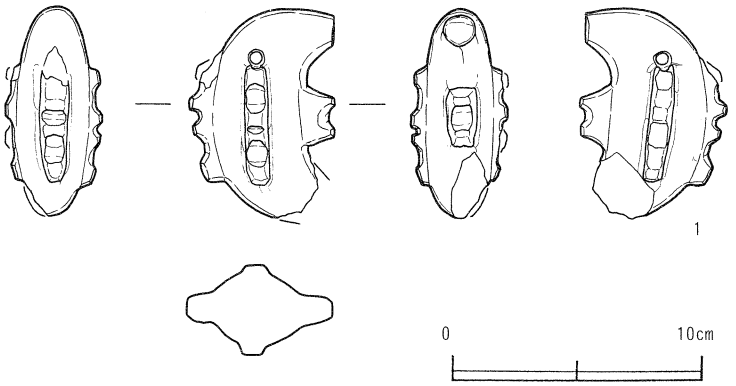
第10表　1号竪穴状遺構遺物観察表

遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 高坏	－	接合部～脚部	－	外面－ヘラミガキ 内面－ヘラケズリ　ハケ	密(赤色粒子　金雲母　砂粒) 良好 淡い橙色	円孔4ヶ所
2	土師器 高坏	－	脚部	－	外面－ヘラミガキ 内面－ヘラケズリ	緻密(赤色粒子 金雲母) 良好 淡赤茶褐色	
3	土師器 器台	－	口縁～脚部	口　(7.8)	外面－ヘラケズリ 内面－ヘラミガキ	緻密(黒雲母　砂粒) 良好 明赤茶褐色	
4	土師器 S字甕	－	口縁部破片	口　(14.0)	外面－ナデ 内面－ナデ	緻密(赤色粒子　砂粒) 良好 淡赤茶褐色	
5	土師器 台付甕	－	接合部	－	外面－ハケ 内面－ハケ	蜜(白色粒子　黒雲母) 良好 明赤褐色	
6	土師器 台付甕	－	接合部	－	外面－ハケ→ナデ 内面－ヘラケズリ	密(赤色粒子 白色粒子　金雲母) 良好 明茶褐色	
7	土師器 小型壷	－	胴部破片	－	外面－ヘラケズリ→ナデ 内面－指頭痕	緻密(赤色粒子　白色粒子　金雲母) 良好 淡茶褐色	

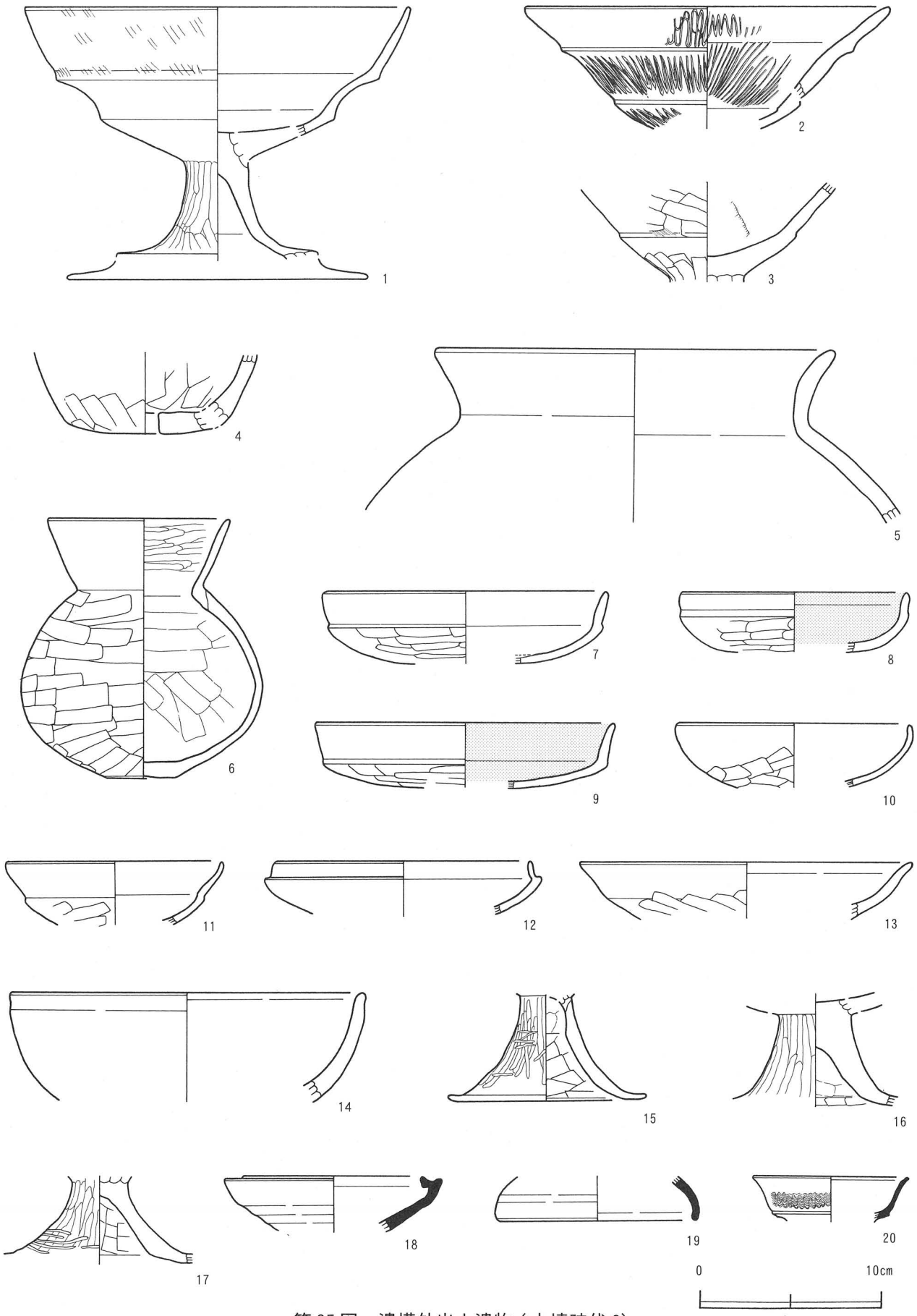
3．遺構外出土遺物（第24・25図、第11表）

今回の調査で、遺構外から出土した古墳時代の遺物の中で主なものを報告する。調査によって確認された古墳時代の住居跡は5世紀前半から7世紀中葉にかけてのものであるが、これらとほぼ同じ時期の土師器や須恵器が出土している。この中で、土師器の高坏（1）と坩（6）は、B38グリッドの東側を中心に破片の状態で出土したものを、ある程度の大きさまで接合したものである。調査の段階ではこれらの遺物が出土したことから、この付近に住居跡が存在していることを想定した。しかし、土の色調の変化等まったく確認することができなかったことから、遺構外出土遺物として扱った。

また、山梨県内で2例目の発見となる子持勾玉（第24図）も出土しており、注目される。



第24図　遺構外出土遺物（古墳時代1）



第25図　遺構外出土遺物（古墳時代2）

第11表　遺構外出土遺物観察表（古墳時代）

遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 高坏	50	口縁～脚部	口　(21.0)	坏部－ハケ　ヘラミガキ 脚部外面－ヘラミガキ 脚部内面－ナデ	緻密(赤色粒子　砂粒) 良好 明茶褐色	
2	土師器 高坏	－	口縁～胴部破片	口　(19.8)	外面－ヘラミガキ 内面－ヘラミガキ	緻密(赤色粒子　金雲母) 良好 暗赤褐色	
3	土師器 高坏	－	胴部破片	－	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ	緻密(白色粒子多) 良好 暗赤褐色	
4	土師器 甑	－	底部破片	底　(8.2)	外面－ナデ 内面－ナデ	やや粗い(赤色粒子　金雲母少　砂粒) 良好 明茶褐色	
5	土師器 甕	－	口縁部破片	口　(21.6)	外面－ナデ 内面－ナデ	やや粗い(砂粒) 良好 明茶褐色	
6	土師器 坩	80	口縁～底部	口　9.8 高　14.3 底　3.7	外面－ヘラケズリ（不明瞭） 内面－ナデ（口縁部－ヘラミガキ） 底部－ナデ	密(赤色粒子　金雲母　砂粒) 良好 黄茶褐色	外面磨耗
7	土師器 坏	－	口縁～底部破片	口　(15.4)	外面－ヘラケズリ 内面－ヘラミガキ	密(赤色粒子　金雲母) 良好 赤茶褐色	内外面とも赤彩痕
8	土師器 坏	－	口縁～底部破片	口　(12.4)	外面－ヘラケズリ 内面－ヘラミガキ	密(赤色粒子　金雲母・黒雲母少) 良好 外-褐色　内-黒色	外面に赤彩痕 内面黒色処理
9	土師器 坏	25	口縁～底部破片	口　(16.4)	外面－ヘラケズリ 内面－ヘラミガキ	密(赤色粒子　金雲母少) 良好 外-淡茶褐色　内-黒色	外面に赤彩痕 内面黒色処理
10	土師器 坏	－	口縁～底部破片	口　(12.6)	外面－ヘラケズリ 内面－ヘラミガキ	緻密(赤色粒子　白色粒子　金雲母) 良好 暗茶褐色	内外面に黒彩痕
11	土師器 坏	－	口縁～胴部破片	口　(11.8)	外面－ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面－ヘラミガキ	緻密(赤色粒子　金雲母) 良好 黄茶褐色	
12	土師器 坏	－	口縁～胴部破片	口　(14.0)	外面－ヘラミガキ 内面－ヘラミガキ	緻密(白色粒子) 良好 暗褐色	
13	土師器 坏	－	口縁～胴部破片	口　(18.2)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ	やや粗い(赤色粒子　白色粒子　黒雲母) 良好 暗茶褐色（一部黒色）	
14	土師器 鉢	－	口縁～胴部破片	口　(19.4)	外面－ナデ 内面－ロクロナデ	やや粗い(赤色粒子　白色粒子　金雲母) 良好 暗茶褐色（一部黒色）	
15	土師器 高坏	－	脚部破片	底　(10.8)	外面－ヘラミガキ 内面－ヘラケズリ	緻密(赤色粒子) 良好 茶褐色	
16	土師器 高坏	－	接合部～脚部破片	－	外面－ヘラミガキ 内面－ヘラケズリ　ナデ	緻密(赤色粒子　白色粒子) 良好 淡黄褐色	
17	土師器 高坏	－	脚部破片	－	外面－ヘラミガキ 内面－ヘラケズリ	緻密(赤色粒子　砂粒) 良好 明赤茶褐色	
18	須恵器 坏	－	口縁～胴部破片	口　(9.6)	外面－ロクロ整形 内面－ロクロ整形	緻密(黒色粒子　白色粒子) 良好 灰褐色	
19	須恵器 蓋	－	口縁部破片	口　(10.6)	外面－ロクロ整形 内面－ロクロ整形	緻密 良好 暗灰褐色	
20	須恵器 甕	－	口縁部破片	口　(8.4)	外面－ロクロ整形　櫛描波状文 内面－ロクロ整形	緻密（白色粒子） 良好 暗灰褐色	

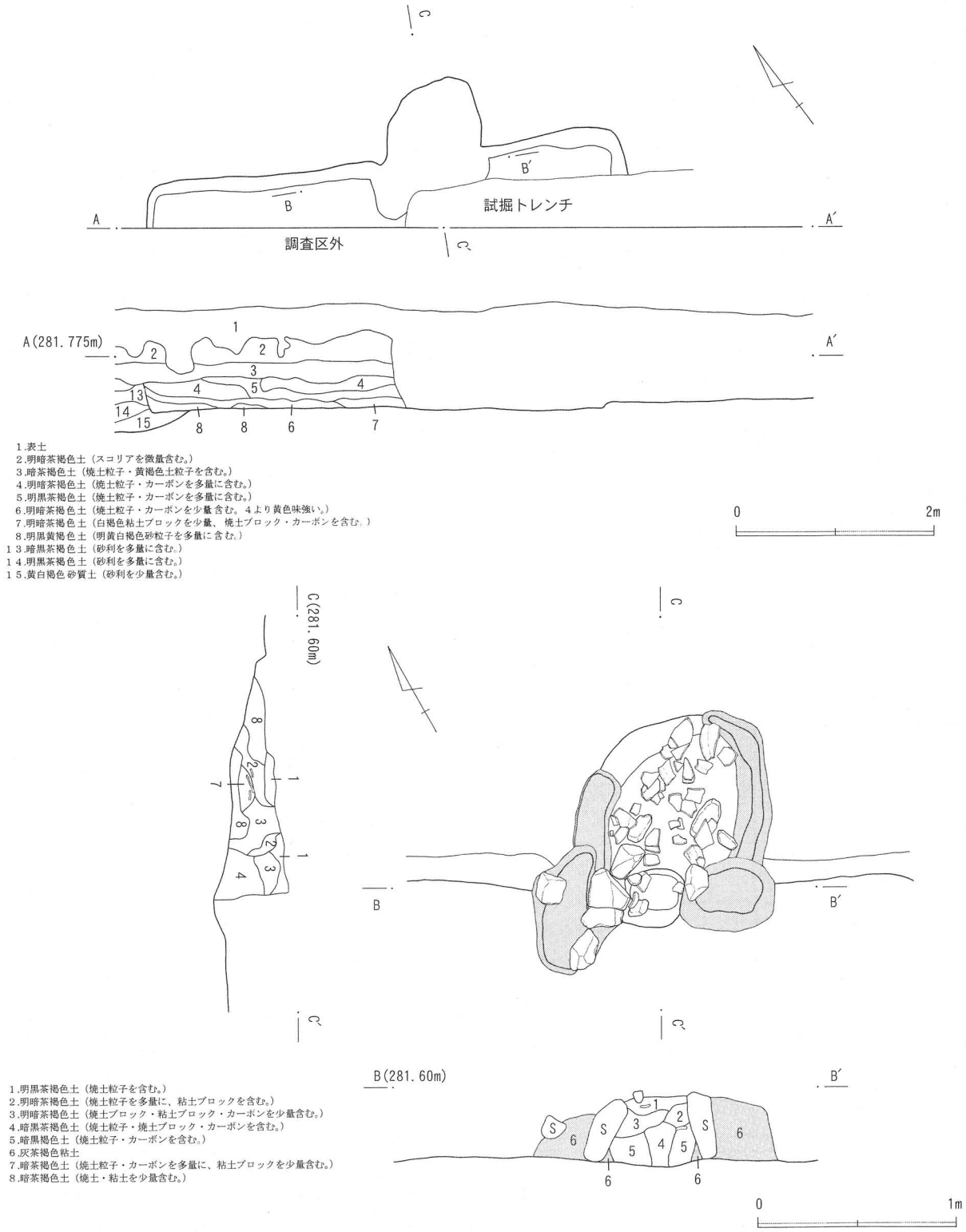
遺物番号	品名	状　態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量（g）	石材	備考
1	子持勾玉	一部欠損	(8.3)	5.8	3.9	159	滑石	第24図

第２節　奈良時代の遺構と遺物

１．竪穴住居跡

10号住居跡（第26・27図、第12・13表）

本住居跡はB－38・B－39グリッドに位置している。１号竪穴状遺構と重複しており、重複関係は１号

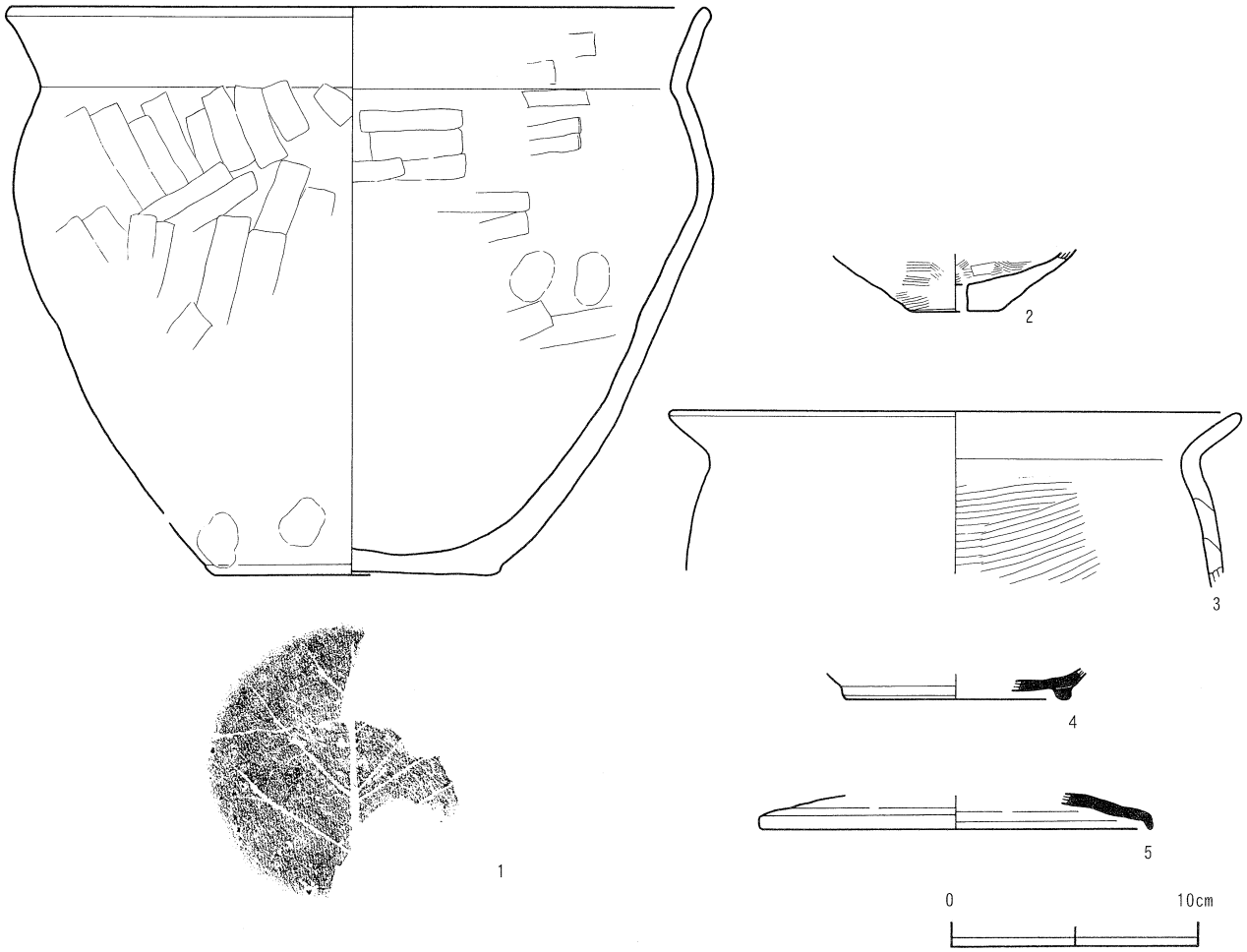


第26図　10号住居跡

竪穴状遺構を切って構築している。

南側の大半が調査区外にあるため全貌は明らかでないが、確認できたところの形状から推測すると、平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈するものと思われ、現状の規模は東西 4.9m、南北 0.7mである。壁はやや緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で 30cm を測る。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかったが、全体的に硬化している。カマドは北壁の中央に構築されており、長さ 130cm、幅 120cm の規模を有する。右袖は試掘調査用のトレンチが掛かっていたため詳細は定かでないが、残った部分から袖石が灰茶褐色粘土によって貼り固められた状態で検出されており、また、左袖からは並べられた 4 個の袖石が灰茶褐色粘土で貼り固められていたことから、袖部は礫を並べて芯とし、灰茶褐色粘土を貼り付けて構築していることがわかる。燃焼部は深さ 3cm 程度の掘り込みがみられ、焼土ブロックや粒子を含む土が堆積していた。

遺物はカマドの煙道部や覆土中から土師器や須恵器が出土している。図示できたものは土師器 3 点と須恵器 2 点で、土師器には鉢（1)、甑（2)、甕（3)、須恵器には高台付坏（4)、蓋（5）がある。この中で、鉢（1)、甑（2)、甕（3）はカマドの煙道部から出土したものである。



第 27 図　10 号住居跡出土遺物

第12表　10号住居跡遺物観察表（1）

遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 鉢	60	口縁～底部	口 (28.0) 高 23.0 底 11.4	外面－ナデ　指頭痕 内面－ナデ　指頭痕 底部－木葉痕	やや粗い(赤色粒子　砂粒) 良好 明赤茶褐色	
2	土師器 甑	－	底部破片	底 (3.6)	外面－ハケ→ナデ 内面－ハケ	密(赤色粒子 金雲母) 良好 淡い橙色	

第13表　10号住居跡遺物観察表（2）

遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
3	土師器 甕	－	口縁部破片	口　(22.8)	外面－ナデ 内面－ハケ	粗い(赤色粒子　砂粒) 良好 茶褐色	
4	須恵器 高台付坏	－	底部破片	底　(9.0)	外面－ロクロ整形 内面－ロクロ整形	緻密(白色粒子) 良好 暗白灰褐色	貼り付け高台
5	須恵器 蓋	－	口縁部破片	口　(15.6)	外面－ロクロ整形 内面－ロクロ整形	緻密 良好 暗白灰褐色	

第３節　平安時代の遺構と遺物

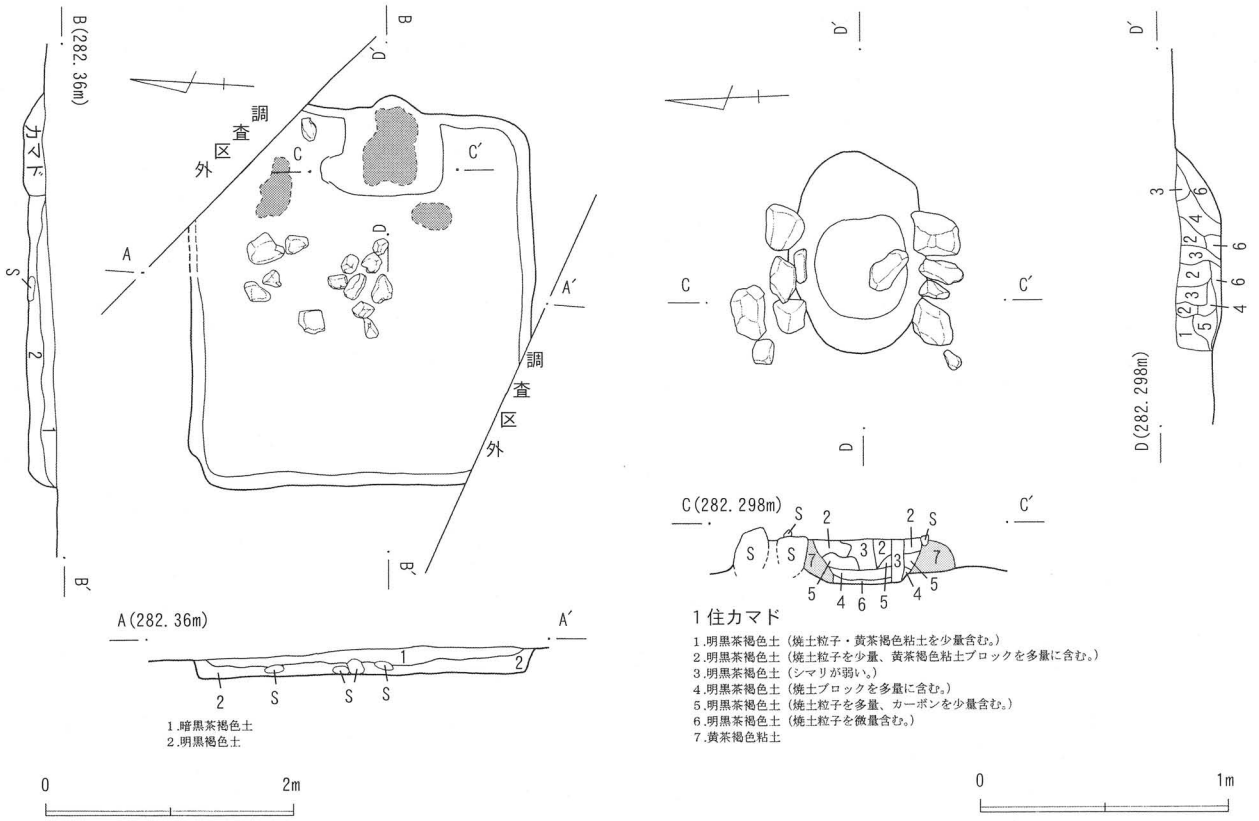
１．竪穴住居跡

１号住居跡（第 28・29 図、第 14 表）

本住居跡はＢ－27 グリッドに位置している。７号住居跡と重複しており、重複関係は７号住居跡を切って構築している。

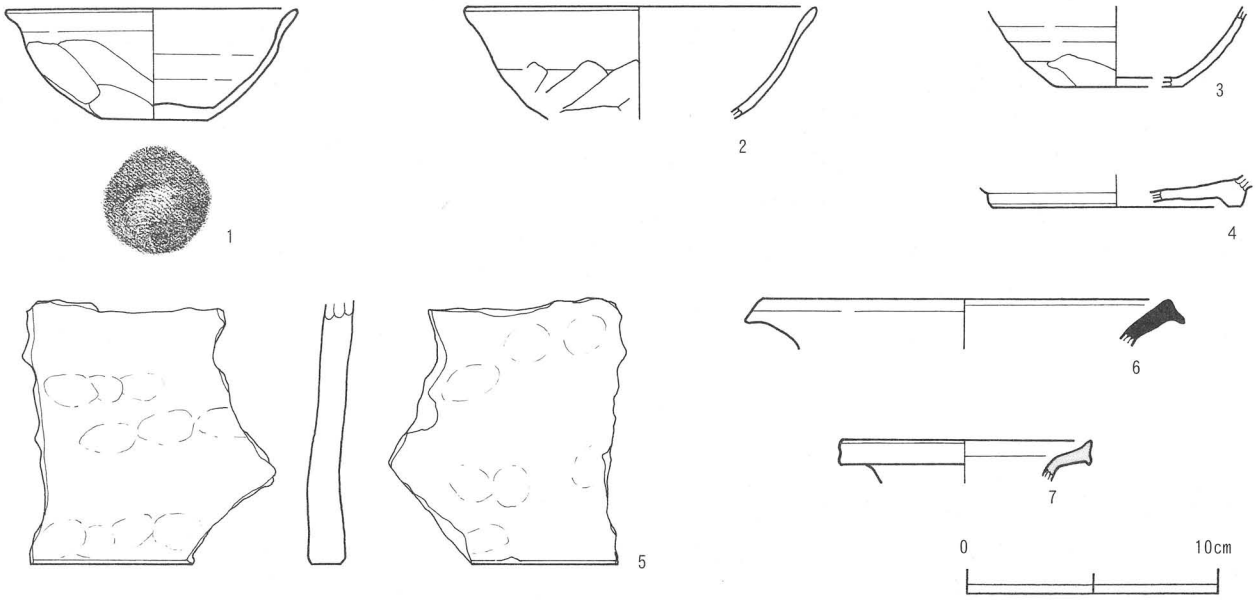
北東コーナー付近と南西コーナー付近が調査区外にあるため全貌は明らかでないが、平面形は隅丸長方形を呈し、確認された規模は東西 3.0m、南北 2.8m である。壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で 19cm を測る。床は若干の凸凹がみられるが概ね平坦で、貼床は確認できなかったが、カマドの周辺で硬化しているのが認められる。カマドは東壁に構築されており、長さ 80cm、幅 86cm の規模を有する。袖部は礫を並べて芯とし、黄茶褐色粘土を貼り付けて構築している。燃焼部には深さ 4cm 程度の掘り込みがあり、焼土はブロック状に検出されているが、明確な堆積では認められなかった。

遺物は土師器や須恵器、灰釉陶器、置きカマドが出土している。図示できたものは７点で、土師器には



第 28 図　１号住居跡

坏（1～3）、高台付坏（4）、須恵器には壷（6）、灰釉陶器には長頸壷（7）、そして置きカマド（5）がある。この中で、坏（1）はカマド内やその周辺から出土したものが接合されたもの、坏（3）と置きカマド（5）はカマド周辺から出土したものである。



第29図　1号住居跡出土遺物

第14表　1号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 坏	90	口縁～底部	口 11.5 高 4.4 底 4.1	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ナデ 底部－回転糸切→ナデ	緻密(赤色粒子　白色粒子) 良好 暗赤茶褐色	
2	土師器 坏	－	口縁～胴部破片	口 (14.0)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ナデ	緻密(赤色粒子少) 良好 明黄茶褐色	
3	土師器 坏	－	胴部～底部破片	底 (5.0)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ナデ	緻密(赤色粒子) 良好 明茶褐色	
4	土師器 高台付坏	－	底部破片	底 (9.8)	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	緻密(赤色粒子) 良好 黄茶褐色	貼り付け高台
5	土師器 置き カマド	－	底部破片	－	外面－ナデ 指頭痕 内面－ナデ 指頭痕	やや粗い(砂粒) 良好 暗茶褐色	
6	須恵器 壷	－	口縁部破片	口 (16.0)	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	緻密 良好 白灰褐色	
7	灰釉陶器 長頸壷	－	口縁部破片	口 (9.8)	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	緻密 良好 灰褐色	

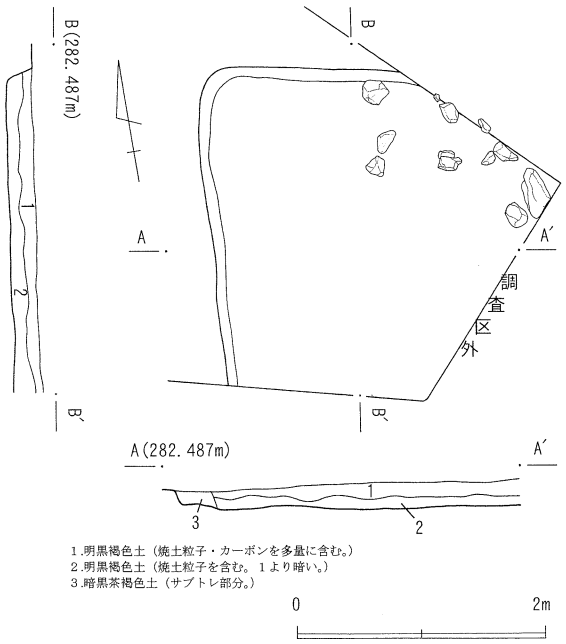
3号住居跡（第30・32図、第15表）

本住居跡はB－26グリッドに位置している。8号住居跡と重複しており、重複関係は8号住居跡を切って構築している。

住居跡の東側と南側が調査区外にあるため全貌は明らかでないが、確認できたところの形状から推測すると、平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈するものと思われ、現状の規模は東西2.9m、南北2.6mである。壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で20cmを測る。床は若干の凸凹があるものの概ね平坦で、貼床は確認できなかったが、全体的にシマリがあり、しっかりとしている。本住居跡の下に所在する8号住居跡の覆土と明らかに違うシマリであることから、その見分けは容易であった。カマドは確認

されておらず、調査区外に所在しているものと思われる。また、住居跡の北東寄りで複数の礫が確認されている。

遺物は土師器や須恵器、置きカマドが出土している。図示できたものは9点で、土師器には坏(1・2)、高台付坏（3・7）、柱状高台付坏（4・5）、柱状高台付坏と思われる口縁部の破片（6）、須恵器には甕（9）、そして置きカマド（8）がある。これらの中で、置きカマド（8）は住居の西壁際で床面上から出土しており、坏（1）は床面上に押し広げられたような形で出土し、坏（2）、高台付坏（3・7）、柱状高台付坏（4）は床面に近いところから出土している。



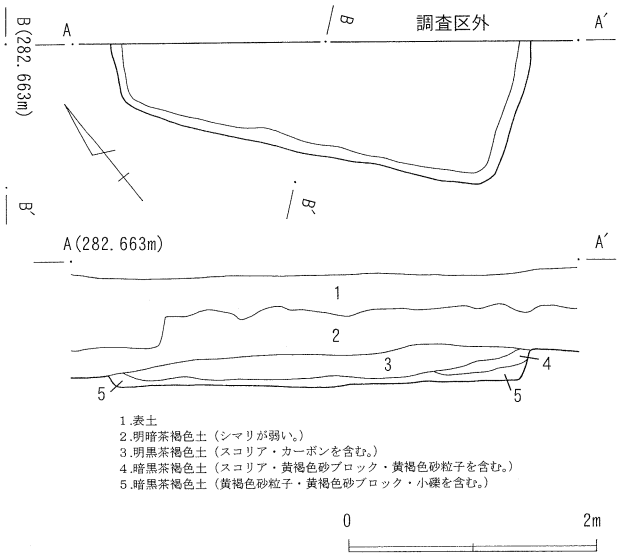
第30図　3号住居跡

5号住居跡（第31・33図、第16表）

本住居跡はB－29・B－30グリッドに位置している。

今回の調査では、住居跡の南側が一部確認されたに留まったためその全貌は明らかでないが、確認できたところの形状から推測すると、平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈するものと思われ、現状の規模は東西3.3m、南北2.2mである。壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で24cmを測る。床は概ね平坦で、貼床や硬化した面は確認できなかったが、比較的しっかりとしている。カマドは確認されておらず、調査区外に所在している可能性がある。

遺物は覆土中から土師器や須恵器、石製品が出土している。図示できたものは土師器4点と石製品1点で、土師器は坏（1～3）、皿（4）、石製品は砥石（5）である。この中で、坏（3）、皿（4）、砥石（5）は床面に近いところから出土している。

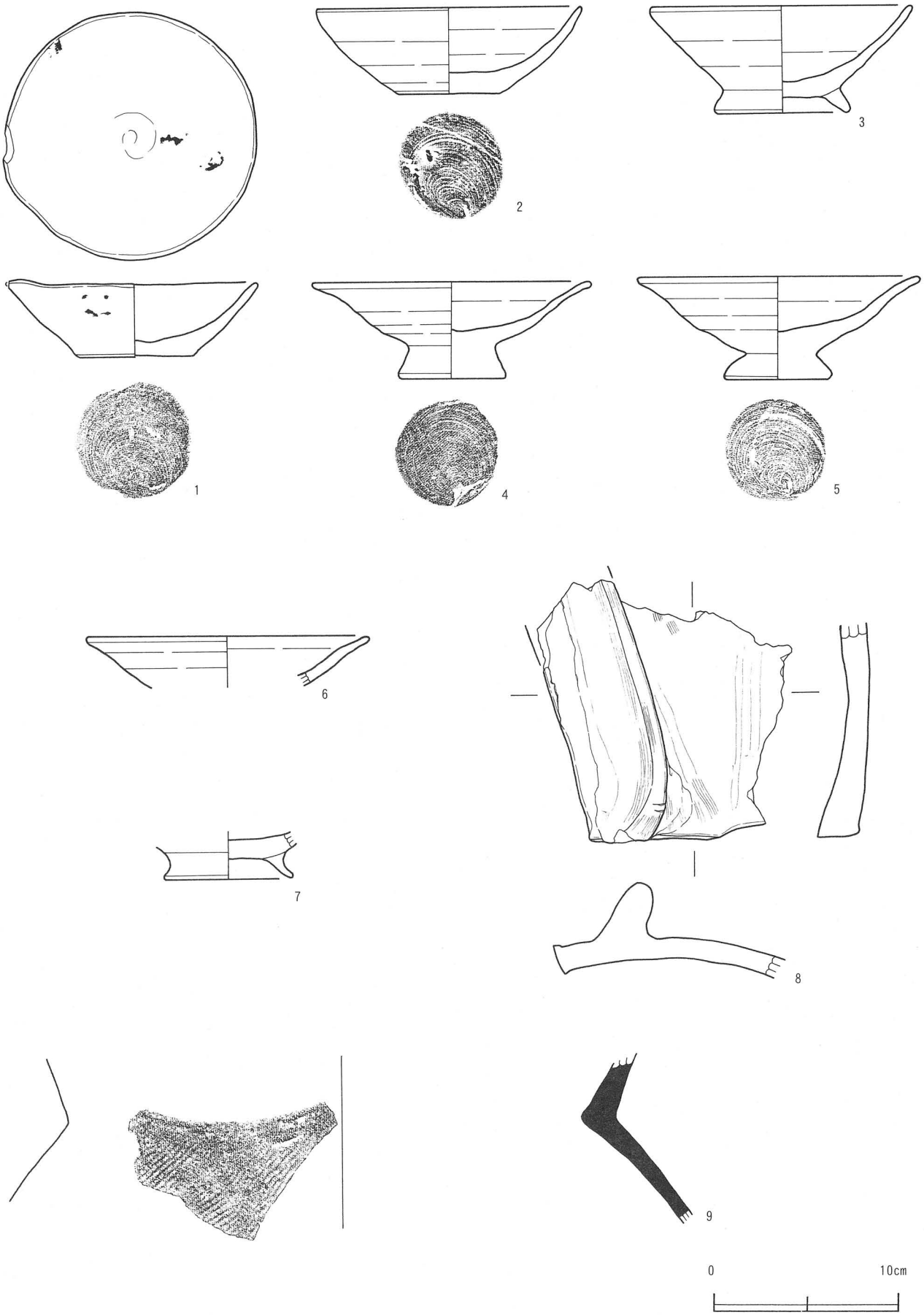


第31図　5号住居跡

7号住居跡（第34・35図、第17表）

本住居跡はB－27グリッドに位置している。1号住居跡と重複しており、重複関係は1号住居跡によって切られている。

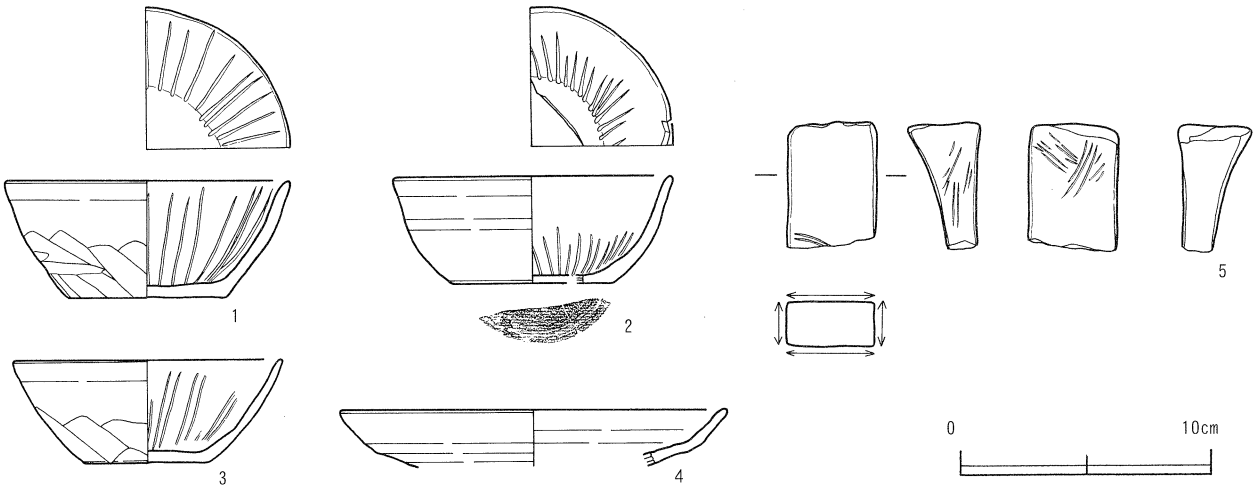
北東コーナー付近が調査区外にあるため全貌は明らかでないが、平面形は隅丸長方形を呈し、確認された規模は東西2.6m、南北3.4mである。壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で41cmを測る。床は概ね平坦で、貼床や硬化した面は確認できなかった。カマドは確認されておらず、調査区外に所在している可能性がある。



第32図　3号住居跡出土遺物

第15表　３号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 坏	98	ほぼ完形	口　13.5 高　4.3 底　6.3	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ 底部－回転糸切	密(赤色粒子　白色粒子) 良好 明黒茶褐色	口縁の一部に凹みあり 煤付着痕あり
2	土師器 坏	75	口縁～底部	口　(14.4) 高　4.7 底　5.5	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ 底部－回転糸切	密(赤色粒子 白色粒子 金雲母) 良好 暗い橙色	
3	土師器 高台付坏	25	口縁～底部	口　(14.0) 高　5.9 底　(7.0)	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	密(白色粒子 金雲母) 良好 淡い橙色	貼り付け高台
4	土師器 柱状 高台付坏	60	口縁～底部	口　(15.2) 高　5.3 底　5.6	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ 底部－回転糸切	密(赤色粒子　白色粒子) 良好 橙色	
5	土師器 柱状 高台付坏	70	口縁～底部	口　15.3 高　5.6 底　5.4	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ 底部－回転糸切	密(赤色粒子　白色粒子) 良好 橙色	
6	土師器 柱状 高台付坏	－	口縁～胴部破片	口　(15.0)	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	緻密(赤色粒子少　白色粒子) 良好 橙色	
7	土師器 高台付坏	－	底部破片	底　6.8	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	密(赤色粒子　白色粒子) 良好 橙色	貼り付け高台
8	土師器 置き カマド	－	底部破片	－	外面－ナデ 内面－ナデ	密(砂粒) 良好 橙色	
9	須恵器 甕	－	胴部破片	－	外面－タタキメ 内面－ナデ　指頭痕	緻密 (砂粒) 良好 黒灰褐色	



第33図　５号住居跡出土遺物

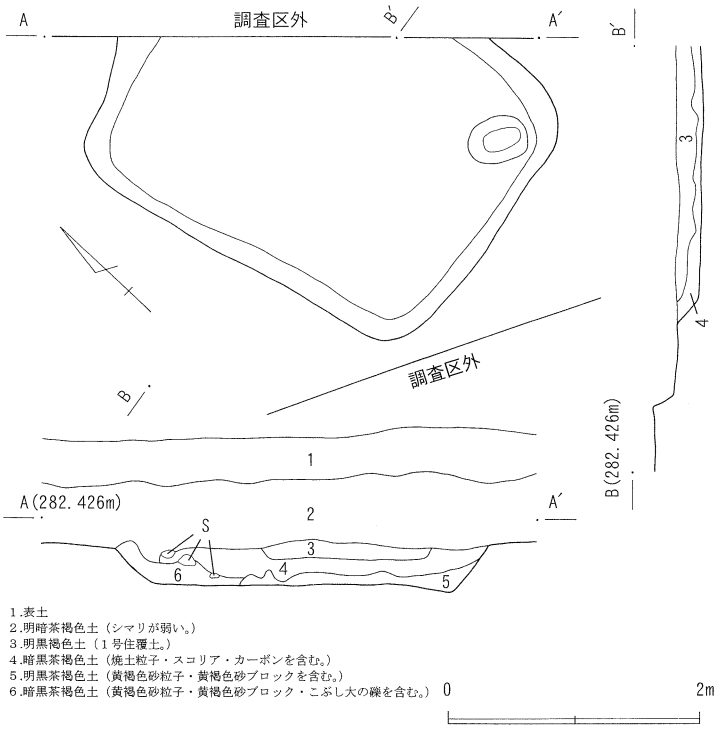
第16表　５号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 坏	50	口縁～底部	口　(11.2) 高　4.7 底　6.4	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ→暗文 底部－ナデ	緻密(赤色粒子・金雲母) 良好 橙色	
2	土師器 坏	25	口縁～底部破片	口　(10.8) 高　4.3 底　(6.4)	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ→暗文 底部－回転糸切	緻密(赤色粒子) 良好 橙色	
3	土師器 坏	40	口縁～底部破片	口　(10.6) 高　4.1 底　5.0	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ→暗文 底部－回転糸切→ナデ	緻密(赤色粒子・金雲母) 良好 暗茶褐色	
4	土師器 皿	20	口縁部破片	口　(15.2)	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	緻密(赤色粒子・金雲母) 良好 淡茶褐色	

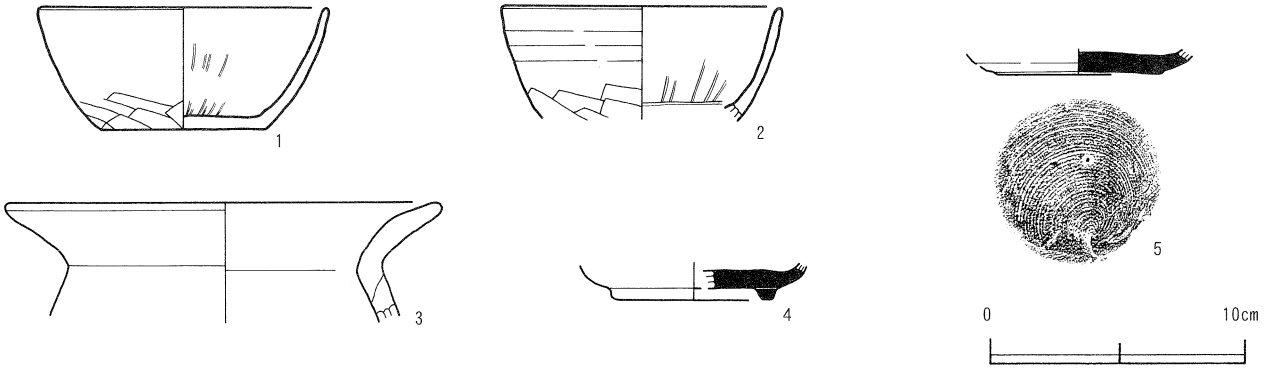
遺物番号	種類	状　態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量（g）	石材	備　考
5	砥石	一部欠損	(4.8)	3.5	2.9	60.3	凝灰岩	

その他の付属施設としてはピットが1基確認されている。このピットは住居の南東コーナーで検出されており、規模は長径49cm、短径38cm、深さ17cmを有する。

遺物は覆土中から土師器や須恵器が出土している。図示できたものは土師器3点と須恵器2点で、土師器は坏（1・2）、甕（3）、須恵器は高台付坏（4）、坏（5）がある。これらの遺物の中で、土師器の坏（1・2）、須恵器の高台付坏（4）、坏（5）は床面に近いところから出土している。



第34図　7号住居跡



第35図　7号住居跡出土遺物

第17表　7号住居跡遺物観察表

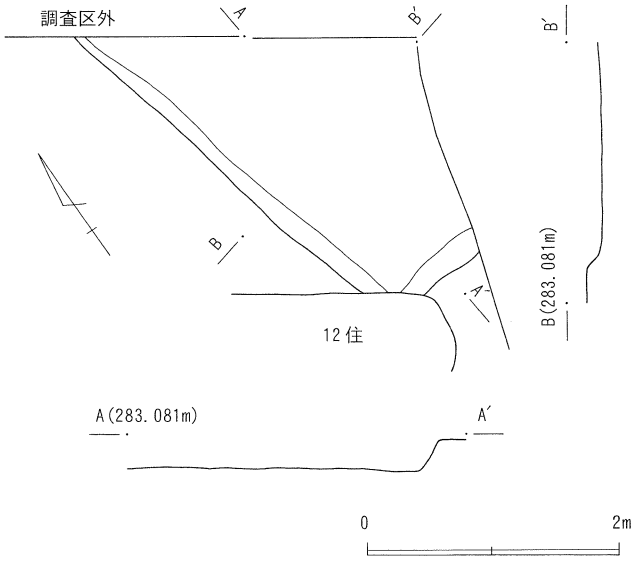
遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 坏	30	口縁～底部 破片	口 (11.2) 高 4.9 底 (6.4)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ→暗文(不明瞭) 底部－回転糸切り→ナデ	緻密(赤色粒子　金雲母) 良好 淡い橙色	
2	土師器 坏	20	口縁部 破片	口 (11.0)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ→暗文	緻密(赤色粒子) 良好 淡い橙色	
3	土師器 甕	－	口縁部 破片	口 (17.0)	外面－ナデ 内面－ナデ	密(赤色粒子 金雲母 砂粒) 良好 明赤茶褐色	
4	須恵器 高台付坏	－	底部 破片	底 (6.4)	外面－ロクロ整形 内面－ロクロ整形 底部－回転糸切り	緻密 (砂粒) 良好 暗灰褐色	貼り付け高台
5	須恵器 坏	－	底部 破片	底 6.4	外面－ロクロ整形 内面－ロクロ整形 底部－回転糸切り	緻密 (砂粒) 良好 暗灰褐色	

13号住居跡（第36・37図、第18・19表）

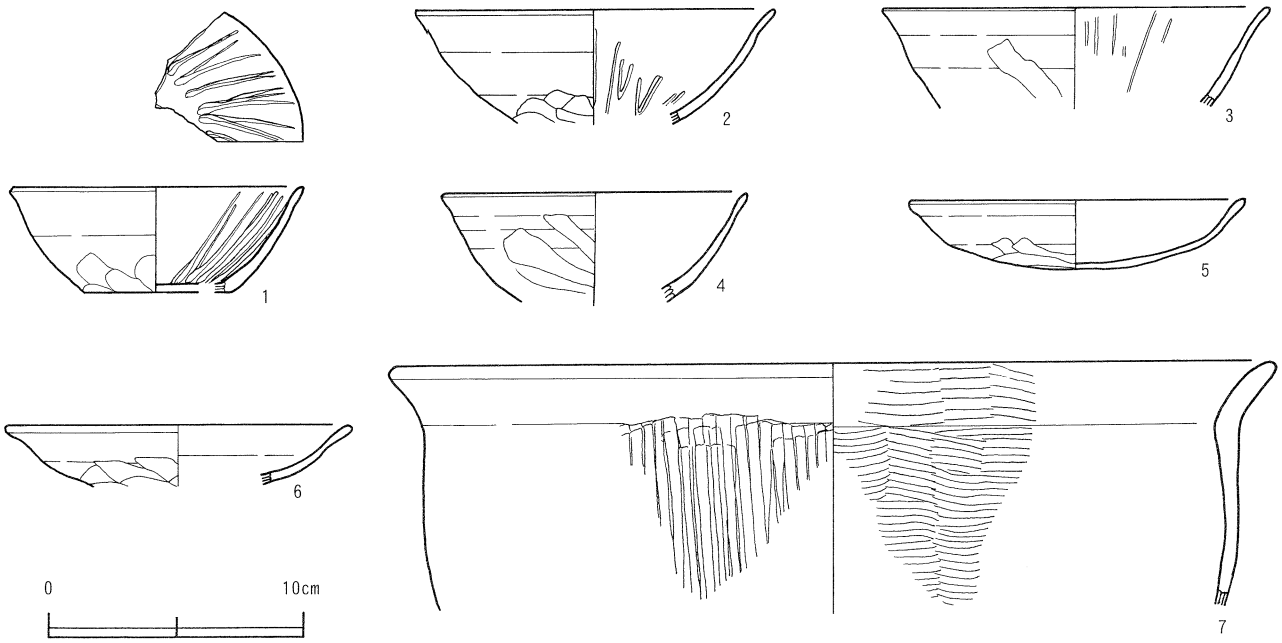
本住居跡はA－19・B－19グリッドに位置している。12号住居跡と重複しており、重複関係は12号住居跡を切って構築している。

住居跡の南西コーナー付近が一部確認されたに留まったため、その全貌は明らかでないが、確認できたところの形状から推測すると、平面形は方形または長方形を呈するものと思われ、現状の規模は東西 1.9m、南北 3.5mである。壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で 26cm を測る。床は若干の凸凹があるものの概ね平坦で、貼床は確認できなかったが、全体的に硬化している。カマドは確認されておらず、調査区外に所在している可能性がある。

遺物は覆土中から土師器や須恵器が出土している。図示できたものは土師器のみ 7 点で、坏（1～4）、皿（5・6）、甕（7）がある。この中で、坏（3）は床面に近いところから出土している。



第 36 図　13 号住居跡



第 37 図　13 号住居跡出土遺物

第18表　13号住居跡遺物観察表（1）

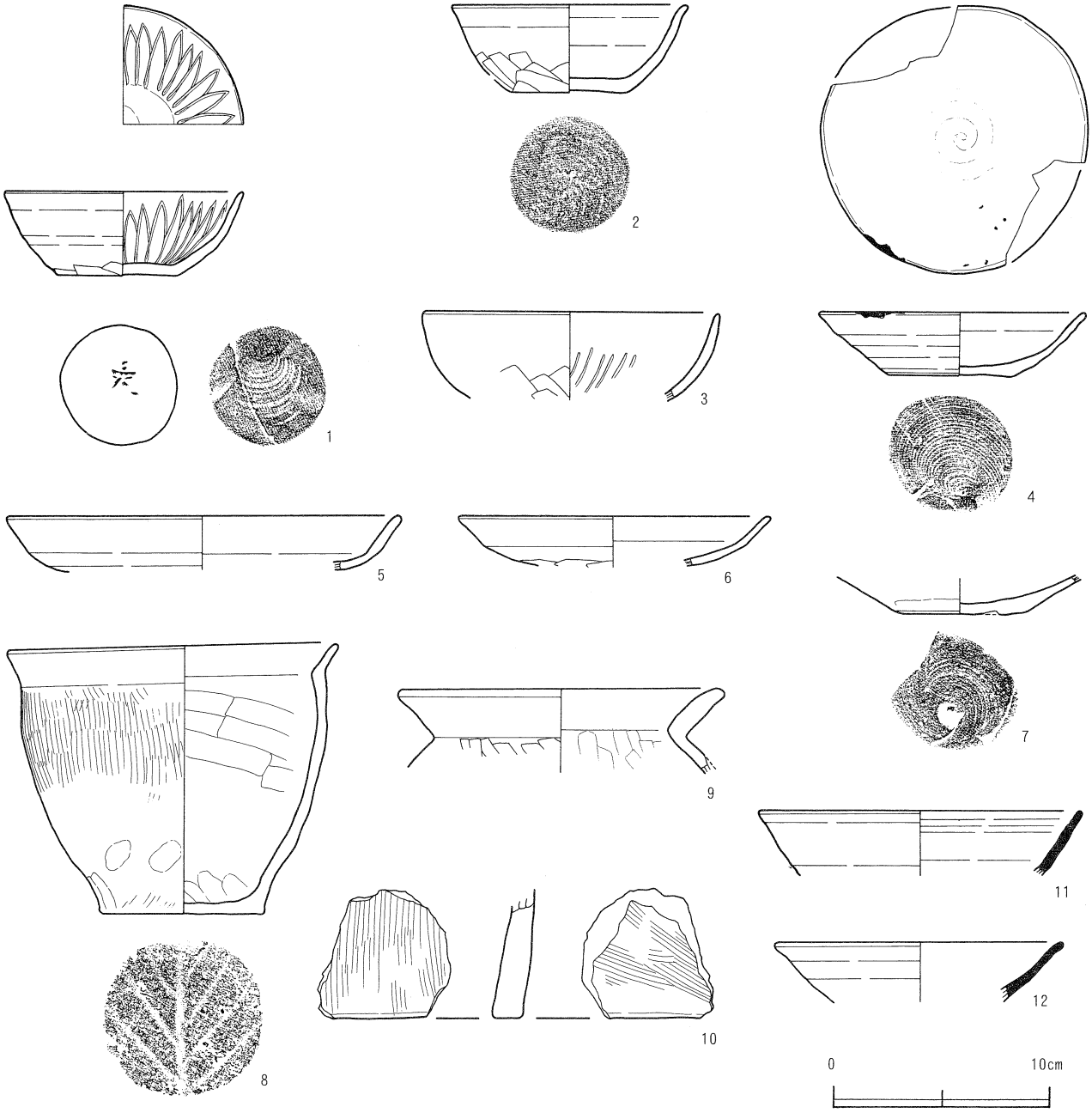
遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 坏	20	口縁～底部 破片	口 (11.4) 高 4.2 底 (5.6)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ→暗文 底部－ヘラケズリ	緻密(赤色粒子) 良好 淡い橙色	
2	土師器 坏	－	口縁～胴部 破片	口 (13.8)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ→暗文	緻密(赤色粒子 白色粒子) 良好 にぶい橙色	
3	土師器 坏	－	口縁～胴部 破片	口 (15.0)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ→暗文	緻密(赤色粒子) 良好 にぶい橙色	
4	土師器 坏	－	口縁～胴部 破片	口 (12.0)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ	緻密(赤色粒子 金雲母) 良好 にぶい橙色	
5	土師器 皿	50	口縁～底部 破片	口 (13.0) 高 2.7 底 (3.6)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	緻密(赤色粒子) 良好 橙色	

第19表　13号住居跡遺物観察表（2）

遺物番号	種別器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
6	土師器皿	20	口縁～胴部破片	口　(13.4)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ	緻密(赤色粒子　白色粒子) 良好 橙色	
7	土師器甕	－	口縁部破片	口　(34.0)	外面－ハケ 内面－ハケ	やや粗い(白色粒子 金雲母) 良好 黒茶褐色	

2．遺構外出土遺物（第38図、第20表）

今回の調査で遺構外から出土した平安時代の遺物の中で主なものを報告する。調査によって確認された平安時代の住居跡とほぼ同時期の土師器や須恵器等が出土している。これらのうち、土師器坏（1）の底部には「大」と墨書されており、また、土師器皿（4）の口縁部には煤が付着した痕跡が認められる。



第38図　遺構外出土遺物（平安時代）

第20表　遺構外出土遺物観察表（平安時代）

遺物番号	種別 器種	残存(%)	状態	大きさ(cm)	調整・文様・技法	胎土・焼成・色調	備考
1	土師器 坏	75	口縁～底部	口 11.0 高 3.9 底 5.5	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ→暗文 底部－回転糸切り→ヘラケズリ	緻密(赤色粒子少) 良好 明茶褐色	底部に墨書
2	土師器 坏	70	口縁～底部	口 (10.6) 高 4.1 底 5.4	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－回転糸切り→ナデ	緻密(赤色粒子　金雲母) 良好 暗黄茶褐色	
3	土師器 坏	－	口縁～胴部破片	口 (13.4)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ→暗文	密(赤色粒子) 良好 茶褐色	
4	土師器 皿	85	口縁～底部	口 12.3 高 2.9 底 5.8	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	緻密(赤色粒子　白色粒子　金雲母) 良好 橙色	煤付着痕あり
5	土師器 皿		口縁～胴部破片	口 (17.8)	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	緻密(赤色粒子　金雲母) 良好 橙色	
6	土師器 皿		口縁～胴部破片	口 (14.2)	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ→ヘラミガキ	緻密(赤色粒子　金雲母) 良好 橙色	
7	土師器 皿		底部破片	底 (5.8)	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子　金雲母) 良好 暗黄茶褐色	
8	土師器 甕	100	完形	口 15.0 高 12.5 底 7.4	外面－ハケ→ナデ 内面－ナデ 底部－木葉痕	密(金雲母多　砂粒) 良好 暗茶褐色	
9	土師器 甕	－	口縁部破片	口 (14.4)	外面－ヘラケズリ 内面－ナデ	やや粗い(赤色粒子　黒雲母少　砂粒) 良好 淡褐色	
10	土師器 置き カマド	－	底部破片	－	外面－ハケ 内面－ハケ	やや粗い(砂粒) 良好 赤茶褐色	
11	須恵器 坏	－	口縁～胴部破片	口 (14.8)	外面－ロクロ整形 内面－ロクロ整形	緻密(白色粒子) 良好 灰褐色	
12	須恵器 坏	－	口縁～胴部破片	口 (13.2)	外面－ロクロ整形 内面－ロクロ整形	緻密(白色粒子) 良好 灰褐色	

第４節　時期不明の遺構

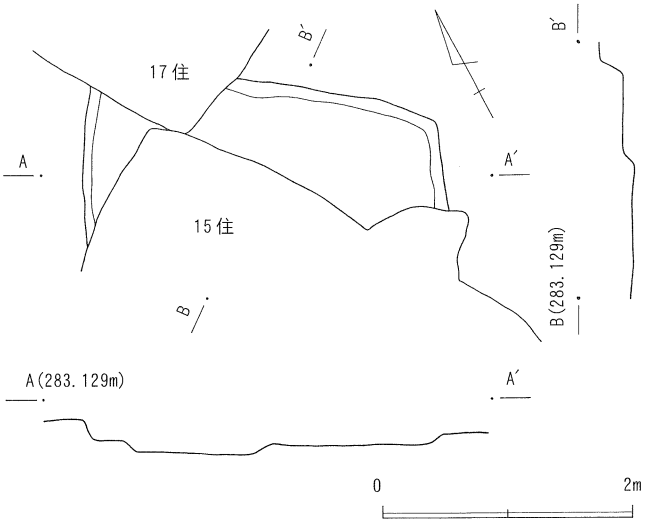
１．竪穴住居跡

16号住居跡（第39図）

本住居跡はB－20グリッドに位置している。15号住居跡、17号住居跡と重複しており、重複関係はこれらの遺構によって切られている。

本住居跡の南側が15号住居跡によって完全に切られているため、その全貌は明らかでないが、確認できたところの形状から推測すると、平面形は方形または長方形を呈するものと思われ、現状の規模は東西2.9m、南北1.5mである。壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は最大で23cmを測る。床は概ね平坦で、貼床や硬化した面は確認できなかったが、比較的しっかりとしている。カマドは確認されていない。

本住居跡からは遺物がまったく出土していな



第39図　16号住居跡

い。しかし、重複している15号住居跡（6世紀前半）によって切られていることから、それよりも前に構築されたものであることは確実である。ただ、それ以上の時期の判断ができないことから、今回は時期不明の遺構として扱った。

第Ⅴ章　まとめ

今回は主要地方道甲府笛吹線の道路拡幅と歩道設置工事に伴い、約180㎡の発掘調査を行った。本遺跡はこれまでに3回の調査が行われ、縄文時代中期前葉および中期後半から後期初頭と古墳時代、平安時代の遺跡で、中でも古墳時代と平安時代を中心とする遺跡であることが把握されていた。

今回の調査では、4世紀後半の竪穴状遺構が1基（1号竪穴状遺構）、5世紀前半の住居跡が1軒（2号住居跡）、5世紀中葉の住居跡が2軒（4号住居跡・8号住居跡）、5世紀後半の住居跡が1軒（11号住居跡）、6世紀前半の住居跡が1軒（15号住居跡）、6世紀後葉の住居跡が1軒（12号住居跡）、7世紀前半の住居跡が1軒（6号住居跡）、7世紀中葉の住居跡が1軒（17号住居跡）、8世紀前半の住居跡が1軒（10号住居跡）、9世紀前半の住居跡が2軒（5号住居跡・7号住居跡）、9世紀後半の住居跡が1軒（13号住居跡）、10世紀前半の住居跡が1軒（1号住居跡）、11世紀末～12世紀の住居跡が1軒（3号住居跡）というように、古墳時代の住居跡8軒、竪穴状遺構1基、奈良時代の住居跡1軒、平安時代の住居跡5軒が確認された。大まかにみると、古墳時代と平安時代の遺構が主体的にみられ、これまでの状況に近い結果が得られているが、新たに奈良時代の住居跡が1軒確認されており、本遺跡の新たな一面を垣間見ることができたものと思われる。

ここでは、平成13年度と今回の調査によって、浅川扇状地上で初めて確認された古墳時代中期の集落と、県内で2例目の出土となった子持勾玉について若干のまとめを行いたいと思う。

古墳時代中期の集落について

今回の調査では古墳時代中期（5世紀代）の住居跡が4軒確認されている。平成13年度に今回の調査区の東側を調査した際にも4軒の住居跡が確認されており、本遺跡から8軒の住居跡が確認されたことになる。これまで浅川扇状地上では、現在は下長崎遺跡となっているが、昭和61（1986）年から62（1987）年にかけて三光神遺跡として調査されたところから、古墳時代中期の遺物が多量に出土しているのが目につく程度であった。この時の調査では遺構は確認されなかったが、遺物の状態や出土量から考えると、調査区の周囲には住居跡等の遺構が存在している可能性が高いと思われる。この辺りは本遺跡と同様に扇状地の扇央部でも扇端部近くに立地していることから、浅川扇状地では扇央部の扇端部近くに古墳時代中期の集落が点在しているのではないかと考えられる。

ところで、浅川扇状地上には全長42mの帆立貝式古墳である狐塚古墳や、全長30m程度の帆立貝式古墳と考えられる団栗塚古墳、直径約12mの円墳で、低墳丘古墳の可能性が指摘されている真根子塚古墳といった5世紀後半に築造された古墳が点在している。また、扇状地内ではないが、扇状地の北西に続く沖積地にも帆立貝式古墳の可能性が指摘され、5世紀代に築造された八幡塚古墳があり、さらに、扇状地を見下ろす丘陵上には、一辺の長さが55m～56mという大型の方墳で、5世紀前葉に築造された竜塚古墳や、直径23mの円墳で、5世紀代に築造された盃塚古墳が所在している。このように浅川扇状地およびその周辺には古墳時代中期に築造された古墳が多数みられるが、これまでこれらの古墳築造を支えた人々の集落が扇状地内のどこに所在しているのか明確ではなかった。ところが、本遺跡の調査によって古墳時代中期の住居跡が8軒確認されたことから、扇状地の扇央部でも扇端部近くに集落が所在している様相が窺い知れたことは大きな成果といえる。ただ、発掘調査されている範囲はごく一部であり、検出された住居跡も8軒と少数であることから、個々の古墳と集落との関係をはじめ、詳細については今後の調査の進展によるところが大きい。

さて、笛吹市内には浅川扇状地以外にも古墳時代中期の住居跡が確認されている遺跡や、古墳時代中期の遺物を多数出土している遺跡がある。本扇状地の北東に隣接する金川扇状地では、扇央部の中でも扇端部近くに立地している二之宮・姥塚遺跡で 21 軒の住居跡が確認されており、扇端部に立地する大原遺跡でも数軒の住居跡が確認されている。また、大石川扇状地においても扇端部に立地している車居遺跡から 2 軒の住居跡が確認されており、さらに、沖積地の中で河川の自然堤防上に立地している境川町の石橋条里制遺跡北砂吐地区で中期の住居跡が 1 軒確認され、石和町の松本塚越遺跡でも中期の遺物が出土している。このようにみると、笛吹市内では古墳時代中期の集落が扇状地の扇端部であるとか、あるいは扇央部でも扇端部に近いところ、また沖積地の中にある河川の自然堤防上というような低地に所在しているようである。また、この時期の集落の在り方については、二之宮・姥塚遺跡の例から数軒を単位としたブロック状に点在する状況が指摘されているが、今後こういった地域の発掘調査が行われ、中期の集落の調査例が増えてくることによって、さらに詳細な集落の在り方が解明されてくるであろう。

子持勾玉について

今回の調査では、B－19 グリッドから滑石製の子持勾玉 1 点を発見した。山梨県内での出土例は極めて希少で、北杜市に所在する柳坪遺跡 A 地区・12 号住居跡から出土したものに次いで 2 例目である。

子持勾玉の研究は、江戸時代に古代の刀剣の柄頭と考えられ、文献に石頭剣と記されたことに始まる。研究史については、佐野大和氏、大平茂氏、篠原祐一氏等の研究で詳しくまとめられているが、未だ明確な結論が見出されておらず、考古学上のスフィンクスと言わしめた所以といえる。

子持勾玉の定義については、篠原氏が「頭尾同形の勾玉状品の本体に、同様の小型勾玉状品を、腹部に 1 顆、背に 3～4 顆、・脇部に 3～4 顆を配し、東部に両面穿孔の垂下孔を穿った形状のものを基本形とする玉」とされている。研究史における形式分類作業は、本体の形状や截面形と突起の形態及び数を基準とした分類から、製作技法・製作意識に着目した分類へ進展しており、形状変化からの時期的な傾向が示されている。本稿では今回出土した遺物の特徴を観察し、佐々木幹雄氏、大平氏、篠原氏の研究を取り上げ、形式分類においてどのような位置付けにあるのか触れておきたい。

〔観察所見〕

今回出土した遺物は、先述のとおり B－19 グリッドで発見したものである。出土位置は 12 号住居跡の確認面であったが、層序観察から遺構には伴わず、包含層からの出土と判断した。遺物の状態は、親勾玉の尾部と背・左脇部の子勾玉の一部が欠損しており、現存では長さ 8.3 cm、幅 5.8 cm、厚さ 3.7 cm、重さ 159.4g を測る。また遺物の表面にも複数のキズがみられ、流れ込みもしくは廃棄されたものと推察される。遺物の形状については、親勾玉は、尾部は欠損しているものの、頭端部は截断され、截面形は楕円形を呈している。子勾玉は背部・脇部の中央に連接して 2 顆ずつ、腹部には 1 顆を削り出そうとした意匠がみられる。子勾玉の形状は、若干内傾して頭尾部に至り、親勾玉同様に頭尾部は截断されている。子勾玉の腹部は扁平な U 字型を呈しており、背・脇部は子勾玉の 1/2 程、腹部の子勾玉は 1/3 程削り込まれている。尾部は欠損しているものの、腹部の子勾玉の截断面と親勾玉の頭部截断面はほぼ直線上に揃っていることが観察できる。孔径は約 5.8mm を測る。成形順序は明確ではないが、穿孔によって脇部の子勾玉端部は削られている。また親勾玉と腹部には、刀具による整形痕が確認でき、丁寧な調整が行われたことが窺える。一方、背・脇部の子勾玉は、成形がやや粗雑であることが看取できる。

〔形式分類・編年との比定〕

佐々木氏による分類：佐々木氏は、1985 年に「子持勾玉私考」において、はじめて製作技法の観点に立った佐田氏の分類を具体的に細分・模式化し、親勾玉 3 型式、子勾玉 4 型式 6 分類の分類試案を提示された。親勾玉は I 型式（頭・尾部の端部が截断され、かつ体部の断面が丸いかまたは丸みをもちつつも楕円形をなし、小型でも全体的に重量感があるもの）・II 型式（頭・尾部の端部がまるくととのえられ、体部の断面が楕円形か、丸みをもちつつやや扁平形となるもの）・III 型式（頭尾部が尖り、断面が扁平系、または

板状となるもの)、子勾玉は a 型式（背・脇部の子勾玉が一つ一つ独立し、子勾玉は相互に連接していないもの）・b 型式（背・脇部の子勾玉がいずれかに部分で相互に連結しているもので、背部に比較的長くつくられるものを b 1、背部の中央にまとめてつくられるものが b2）・c 型式（b と d の中間で、背部の子勾玉の間を親玉までえぐるもの）・d 型式（背部の子勾玉を、親勾玉を削りこんでつくるもので、大きく幅広くゆるやかに削り込むものを d1、細かく刻み込むものを d2）に分類されている。

この分類は試案として提示されたものであるが、これによって形式変化を製作技法上から見る観点が定着することになった。なお、本遺物は I －b2 型式に該当するものと考えられる。

大平氏による分類：大平氏は、1989 年に「子持勾玉年代考」で、先学の形式分類の評価批判を通じ、突起（子勾玉）を重要視しすぎている傾向を指摘した。また編年の基準は本体のみで分けるべきで、突起（子勾玉）は形態分類のみに使用し、形式ごとの変遷を考える必要性を示唆されている。

大平氏の分類は、背部の突起に重点をおき、A 型（突起独立式）と B 型（突起連接式）、さらに頭尾両端を平面的に截り落としたものを 1 類、両端が鋭角化したものを 2 類としている。また時期決定可能な資料の検討を行った上で、本体断面（最大幅に対する同断面の厚み）の比率と、本体反りの比率（長軸の長さに対する同短軸の長さ）から編年を試みている。これにより、古い時代ほど断面円形に近い（断面比率が高い）ことと、本体断面比率が同じであっても本体反りの比率が大きくなれば、古く考えられる傾向を確認されている。本遺物は B—1 類となるが、編年については尾部が欠損しているため、明確ではない。

篠原氏による分類：篠原氏は、2002 年に「子持勾玉小考」で、製作技術上の観点を更に進めた分類試案を示されている。製作技術の簡略化・退化による形態変化について、篠原氏は製作の基となる母岩に着目され、「模式的に腹部子勾玉から背部子勾玉までの幅、親勾玉までの長さ、脇部子勾玉を含めた厚さは、削り出される母岩の大きさに影響される」ことを指摘した。また母岩の厚さと幅の増減については、製作技術力の変化や、石材供給及び石製模造品の粗製濫造期の経験などが要因として考えられることを示唆して

親勾玉截面形
- A 型式　荒割工程時の厚みが十分であることから、親勾玉の截面形が円もしくは円に近い。
- B 型式　截面形が楕円もしくは扁平に近い楕円形。
- C 型式　截面形が長軸の長い隅丸台形もしくは台形。
- D 型式　截面形が扁平もしくは板状。

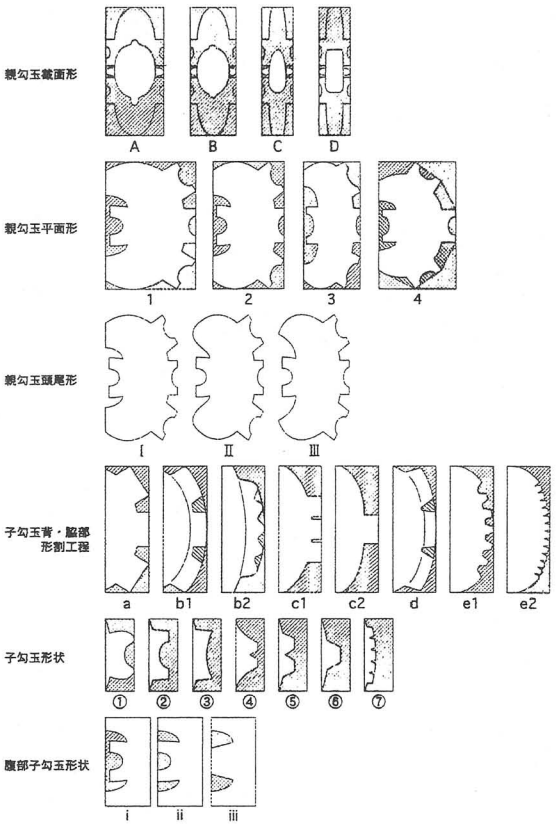
親勾玉平面形
- 1 型式　荒割工程時の大きさが十分なもの。長さ 1 に対して、幅が70 ～ 60%のもの。
- 2 型式　長さ 1 に対して、幅が50%前後のもの。
- 3 型式　長さ 1 に対して、幅が40%前後のもの。
- 4 型式　頭尾の位置より、子勾玉が突出するもの。

親勾玉頭尾形
- Ⅰ 型式　頭尾端部を截断するもの。
- Ⅱ 型式　頭尾端部を丸くするもの。
- Ⅲ 型式　頭尾端部を尖らせるもの。

子勾玉背・脇部形割工程
- a 型式　背・脇部が独立ブロックから作り出されるもの。
- b_1 型式　背・脇部の基底部が連接する帯状ブロックから、独立ブロック状に削り出されるもの。
- b_2 型式　背・脇部の基底部が連接する帯状ブロックから、山形に削り出されるもの。
- c_1 型式　背・脇部が中央部にまとまるもののうち、子勾玉が二顆から三顆作り出されるもの。
- c_2 型式　背・脇部が中央部にまとまるもののうち、子勾玉が一顆作り出されるもの。
- d 型式　背・脇部の連接ブロックを分割する際、親勾玉本体を削り込むもの。
- e_1 型式　親勾玉の背部を削り出すもののうち、台形のもの。
- e_2 型式　親勾玉の背部を削り出すもののうち、細かく刻み込むもの。

子勾玉形状
- ①型式　所謂勾玉状に頭尾彎曲するもの。
- ②型式　内傾して頭尾部に至り、頭尾部は截断するもの。腹部は深く彎曲するもの。
- ③型式　内傾して頭尾部に至り、頭尾部は尖るもの。腹部は緩く彎曲するもの。
- ④型式　山形の先端を分割するもの。
- ⑤型式　台形を分割して頭尾となすもの。
- ⑥型式　台形のもの。
- ⑦型式　細かい刻みで表現するもの。

腹部子勾玉形状
- i 型式　頭尾端部が、親勾玉の頭尾を結ぶ線より内側のもの。
- ii 型式　頭尾端部が、親勾玉の頭尾を結ぶ線上にあるもの。
- iii 型式　台形のもの。



第 40 図　子持勾玉型式分類模式図（篠原祐一 2002 掲載図より引用）

いる。篠原氏の分類試案は「原石の選択に左右される荒割品に加え、製作技法上の難易度による技術対価及び政策時の省略傾向を考慮」して、親勾玉については截面形を4型式、平面形を4型式、頭尾形を3型式、子勾玉については背・脇部形割工程を5型式8分類、子勾玉形状を7型式、腹部子勾玉形状を3型式に細分されている（第40図）。なお、本遺物については、欠損部分があるものの、B－1－Ⅰ－C1－②－ⅱに位置付けられるものと考えられる。

以上、各形式分類との位置付けを示した。時期的傾向については、佐々木氏、篠原氏の分類における位置づけから、5世紀後半から6世紀中頃である可能性が窺えた。また先述のとおり、大平氏の研究では親勾玉の形態変化による編年を検討されているが、本遺物は欠損部があるため条件に合わず、明確な時期比定はできなかった。なお、筆者の浅学により各氏の研究について誤認してしまった点については、御叱正を頂戴し、今後調査研究を進めていくなかで改めていくことにしたい。

（望月秀和）

引用・参考文献

大平　茂　1989　「子持勾玉年代考」　『古文化談叢』第21集　九州古文化研究会

坂本美夫　1998　「甲斐における部民制の成立とその態様　－伝豊富村出土F字形鏡板付轡を中心として－」『山梨県史研究』第6号　山梨県

佐々木幹雄　1985　「子持勾玉私考」　『古代探叢Ⅱ』　早稲田大学出版部

佐野大和　1981　「子持勾玉」　『神道考古学講座』第3巻　原始神道期二　古墳時代の祭祀遺物

篠原祐一　2002　「子持勾玉小考」　『子持勾玉資料集成』付録　國學院大學日本文化研究所

森　和敏　1984　『山梨の考古資料集』

石和町教育委員会・石和町遺跡調査会　1990　『松本塚ノ越遺跡』

一宮町教育委員会・一宮町遺跡調査会　1990　『大原遺跡発掘調査概報』

境川村教育委員会　2003　『石橋条里（3次）・石橋遺跡』

御坂町教育委員会・甲斐丘陵考古学研究会　1979　『御坂町の埋蔵文化財』

八代町　1975　『八代町誌』（上巻）

八代町教育委員会　1984　『五里原遺跡発掘調査概報』

八代町教育委員会　1987　『三光神遺跡』

八代町教育委員会　1989　『真根子塚古墳』

八代町教育委員会　1990　『遺跡詳細分布調査報告書』

八代町教育委員会　1996　『堀ノ内遺跡』

八代町教育委員会　2003　『金地蔵遺跡』

八代町教育委員会　2003　『四反田遺跡・東小山B遺跡・東小山C遺跡』

八代町教育委員会　2004　『下長崎遺跡』

八代町教育委員会　2004　『身洗沢遺跡』

笛吹市教育委員会　2005　『夜長遺跡』

山梨考古学研究会　1975　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内―』

山梨県　1998　『山梨県史』資料編1　原始・古代1

山梨県　1999　『山梨県史』資料編2　原始・古代2

山梨県教育委員会　1964　『山梨県遺跡地名表』

山梨県教育委員会　1978　『昭和52年度（笛吹川沿岸土地改良事業地域内）埋蔵文化財分布調査報告書』

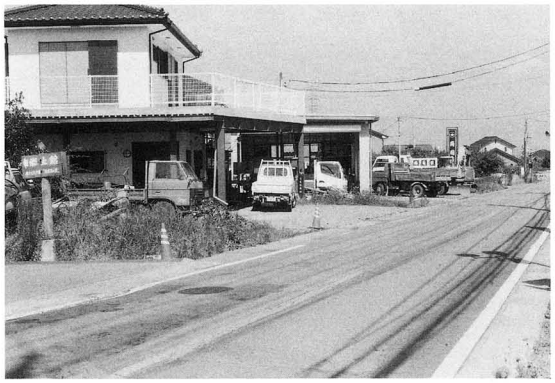
山梨県教育委員会　1987　『姥塚遺跡・姥塚無名墳』

山梨県教育委員会　1987　『二之宮遺跡』

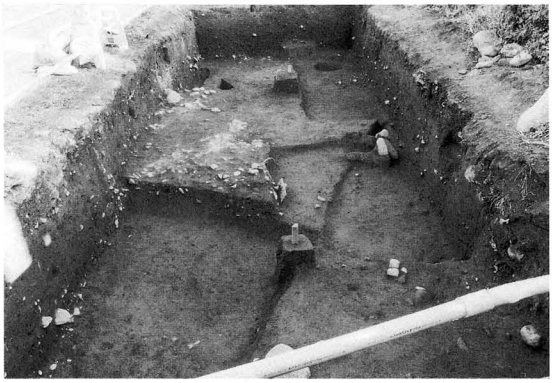
山梨県教育委員会　1989　『下長崎遺跡・両の木神社遺跡』

図　　版

図版 1



調査前風景



遺構検出状況（B-19・B-20 グリッド付近）

遺構検出状況（B-38・B-39 グリッド付近）

1 号住居跡

1 号住居跡カマド

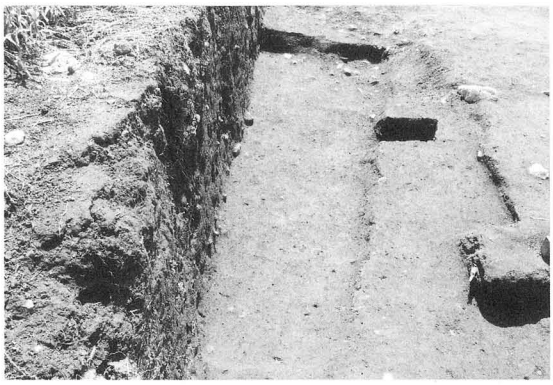
2 号住居跡

3 号住居跡

3 号住居跡遺物出土状況

図版 2

4 号住居跡



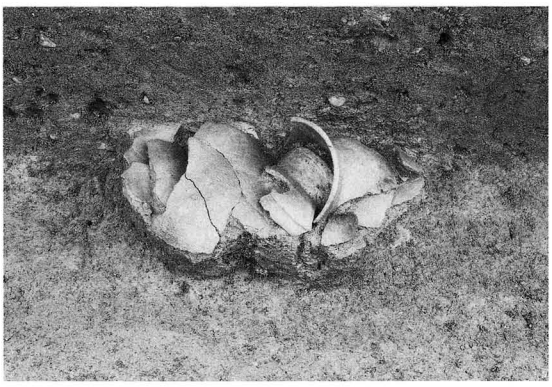
5 号住居跡

10 号住居跡

7 号住居跡

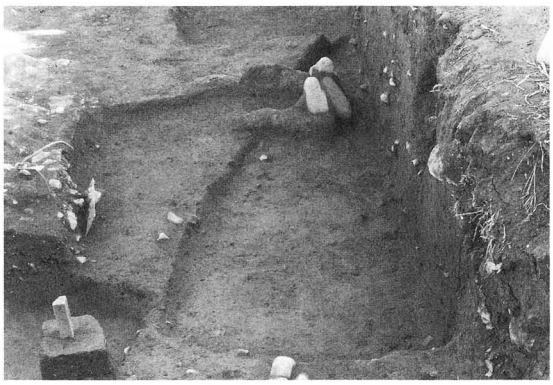
10 号住居跡カマド

12 号住居跡

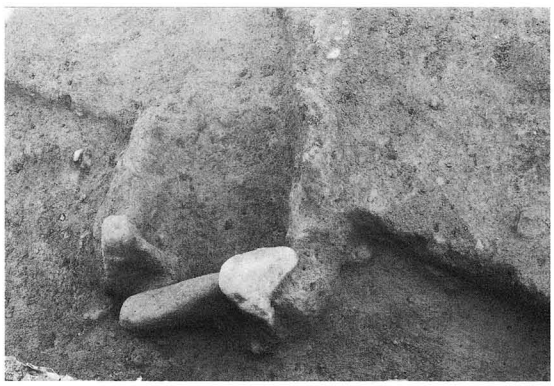


12 号住居跡遺物出土状況

図版 3



15 号住居跡



15 号住居跡カマド

15 号住居跡遺物出土状況

17 号住居跡

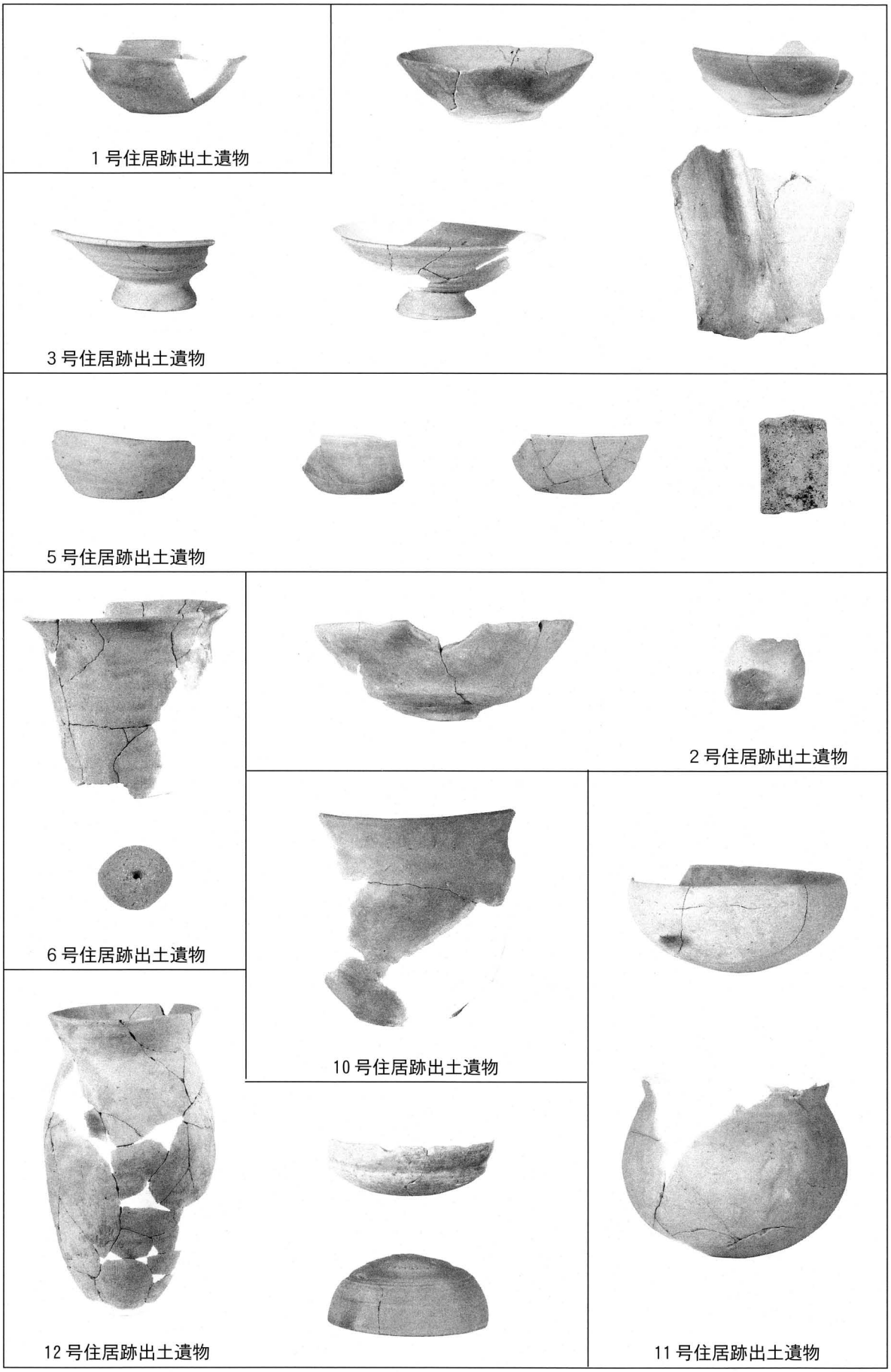
17 号住居跡遺物出土状況 (1)

17 号住居跡遺物出土状況 (2)

1 号竪穴状遺構

子持勾玉出土状況

図版 4


1 号住居跡出土遺物
3 号住居跡出土遺物
5 号住居跡出土遺物
6 号住居跡出土遺物
2 号住居跡出土遺物
10 号住居跡出土遺物
12 号住居跡出土遺物
11 号住居跡出土遺物

図版 5

報告書抄録

ふりがな	ごりはらいせき
書名	五里原遺跡
副書名	主要地方道甲府笛吹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書
シリーズ番号	第6集
編著者名	伊藤修二、望月秀和
編集機関	笛吹市教育委員会
所在地	〒406-8555　山梨県笛吹市八代町南527　TEL 055-（265）-4852
発行年月日	2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	測地系 北緯	測地系 東経	調査期間	調査面積	調査原因
五里原遺跡（ごりはらいせき）	山梨県笛吹市（やまなしけんふえふきし） 八代町南（やつしろちょうみなみ） 字五里原1182-1他（あざごりはら1182-1ほか）			35°37’7”	138°38’12”	20040707 ～20041126	約180㎡	主要地方道甲府笛吹線建設工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五里原遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 8軒 竪穴状遺構 1基	土師器・須恵器・土製品（土玉）・石製品（子持勾玉） 土師器・須恵器	
		奈良時代	竪穴住居跡 1軒	土師器・須恵器・灰釉陶器・石製品（砥石）	
		平安時代	竪穴住居跡 5軒		
		時期不明	竪穴住居跡 1軒		

笛吹市文化財調査報告書　第6集

五　里　原　遺　跡

発行日　平成19年3月30日
発　行　笛吹市教育委員会
印　刷　稲　村　印　刷　社
山梨県笛吹市石和町下平井1370

Fuefuki City Archaelogical Report Vol.6

The Report of Archaeological Research of GORIHARA Site

Archaeological Rescue Survey prior to the Construction of Principal Prefectural Road "Kofu-Fuefuki Line"

March, 2007

Construction Department, Yamanashi Prefectural

Development Office of Kyoto Area

Fuefuki City Board of Education